
GOD EATER—青葉に滴る雨—

イチゴダイフク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R ― 青葉に滴る雨 ―

【Nコード】

N 3 4 9 7 K

【作者名】

イチゴダイフク

【あらすじ】

アラガミに全てを喰い荒らされた世界。神に争う人々の、終わらない戦いがあった――。

フェンリル極東支部『アナグラ』にやって来た新型神機使いの少年は、過去の出来事により心に傷を負っていた。強くて弱い少年と、彼を支える仲間たちのお話。

（ゲームのストーリーに沿いながら、主人公を中心にオリジナル要

素を幾つか混ぜる予定です)

適合試験（前書き）

読者の皆様こんにちは、もしくは初めまして、イチゴダイフクです。

一作目と二作目が連載中ですが、はい……申し訳ありません。

実は一作目の最終部のプロット作りで行き詰りまして、息抜きに書いてみました。なので、突然連載が一時的に止まったりする可能性大です。

暇つぶし程度に読んでいただけたら幸いです。

宣伝

一作目「夏の疾走」二作目「この空の物語」も、気が向いた方はよろしく願います。

適合試験

「支部長、照合中のデータベースから、新型神機の適合候補者が見つかりました」

「そうか。名前は何と言う？」

シックザール支部長は、ディスプレイに表示された適合候補者の写真と名前に目を落とした。

『神矢 スイウ』

十六歳。第一印象は、可愛い少女。幼さを残した小さな顔に、大きな瞳。わずかに褐色に染めた髪は、肩の辺りまで伸ばしている。身体は細く色白で、どこことなく儂い印象を受ける。

「ふむ……早速、適合試験を受けてもらうつしよ」

……

右腕に衝撃が走った。

「うっ……あ、あああっ!!」

耐えがたい激痛が走り、悲鳴を上げる。意識が飛びそうになる中
思い浮かんできたのは、あの日の光景――

「っ……」

——アラガミ
荒神が、憎い。

——復讐のための力が、欲しい。

——ボクに、力を……

「おめでとっ」

床に膝をついてうなだれて、酷く乱れた呼吸を整えていると、落ち着いた男性の声が聞こえた。

「キミが、この極東支部初の——『新型』ゴッドイーターだ」

——神を喰らう、力を。

……

「ねえ……ガム食べる？」

「ん？」

無事に適合試験を終えて、待機を命じられた部屋で待っていると、退屈そうに貧乏ゆすりしている少年が話しかけてきた。

「あ、切れてた。今食べてるのが最後だったみたい。ごめんごめん」

明るく笑って、少年はまた貧乏ゆすりを始めた。外部居住区で人気のポップブランドの衣服、アリーキャットの下に身を包んでいる。

「アンタも適合者なの？」

「うん」

「へえ……オレと同じか、少し年上っぽいけど……まあ、一瞬とはいえ、オレの方が先輩ってことで！」

少年が手を差し出してきた。

「よろしく！」

「あ……うん。こちらこそ」

スイウが手を握り返すと、少年はパツと顔を輝かせた。

「うおおーっ！ 初日からカワイイ子と手繋いじゃった！」

「……………え？ ……あの……………」

声を上げて喜ぶ少年に訂正を入れようとして、カツカツと足音が聞こえた。足音の方に目をやると、スタイルのいい女性が冷たい目でこちらを見下している。

「何を騒いでいる。立て」

「え？」

「立てと言っている。立たんか！」

ビシッ！ と背筋を伸ばして少年が立ち上がった。それに少し遅れて、スイウも立ち上がる。

「これから予定が詰まっているので、簡潔に済ますぞ」

女性 は、雨宮ツバキと名乗った。スイウたちの教練担当者——らしい。

「これからの予定は、メディカルチェックを済ませたのち、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の取り扱いなどのカリキュラムをこなしてもらう」

ツバキの威圧するような雰囲気にながら、スイウは隣の少年を見やった。——まだビシッ！ としたままだ。

「今までは守られる側だったかもしれないが、これからは守る側だ。つまらないことで死にたくなければ、私の命令にはすべてYESで答える。いいな？」

「……………」

「分かったら返事をしろ！」

「はい！」

「……………はい」

「よろしい。さっそくメディカルチェックを始めるぞ。……まずは
お前からだ」

スイウを見て、ツバキは指示を出す。

「ペイラー・サカキ博士の部屋に、一五〇〇までに集まるように。
それまで、この施設を見回っておけ」

ツバキの言葉に、二人は周囲を見回した。この施設の名称なら知
っている。この時代に生きる者なら、知らない者はいないだろう。

「今日からお前らが世話になる、フェンリル極東支部——通称『ア
ナグラ』だ。メンバーに、挨拶の一つもしておくように」

「はい！」

「……はい」

今度は返事を忘れずに返した。言われたとおりにアナグラを見て
おこつと歩きだそうとして、呼び止められる。

「おい、お前……スイウ」

「はい……？」

何か、癪に障ることもしただろうか。そんな風に内心で怯えな
がらまた目の前に立つと、予想とは違う——しかし、決して気分の
いいわけではないことを訊ねられた。

「『あの『アラガミのことだが……』」

「！」

話し終えてツバキが歩き去っても、スイウはその場に立ち尽くしていた。

メデイカルチェック（前書き）

昨日、公立高校の合格発表がありました。友達は受かったのですが、とりあえずめでたしめでたしです。

メデイカルチェック

「ふむ……予想よりも、726秒も早い」

暗い気持ちで部屋に入ると、眼鏡の奥の切れ長の目を光らせながらサカキ博士は言った。

「よく来たね、『新型』くん。私はペイラー・サカキ。アラガミ技術開発の統括責任者だ。以後、キミとはよく顔を合わせるようになると思うけど、よろしく頼むよ」

「はあ……」

「さて、と……見ての通り、まだ準備中なんだ。……ヨハン、先にキミの用事を済ませたらどうだい？」

「サカキ博士……そろそろ公私のけじめを覚えていただきたい」

横に立っていた男性は、うんざりした表情でサカキ博士に言い、それからスイウに向き直った。

「適合テストではご苦労だった。私は、ヨハネス・フォン・シックザール。この地域の、フェンリル支部を統括している」

つまり、この人物が支部長ということだ。

シックザール支部長は、「キミには期待しているよ」と言った。

「期待してるって……そんな、ボクに戦いなんか……」

「安心したまえ。ここには、優秀な人材が多く集まっている。……
そうだな。最初は、リンドウくんに同行してもらったらどうだろう
？」

「どうだろう？　と言われても、リンドウという人物が誰なのか知らない
ので返事のしようがない。」

「彼も、『元』技術屋なんだよ」

しばらく黙っていたサカキ博士が、難しそうな機械を操作しながら口を挟んできた。シックザール支部長に見えないように、反対側の口の端を少し上げて言う。

「ヨハンも、『新型』のメディカルチェックに興味津々なんだよね？」

「あなたがいるから、技術屋を廃業することにしたんだ。自覚した
まえ」

「本当に廃業したのかい？」

サカキ博士はそんなことを言ったが、支部長はそれには答えずス
イウを見て言った。

「ふっ……さて、ここからが本題だ」

そう前置きして、支部長はフェンリルの目標について語りだした。

「キミの直接の任務は、ここ極東地域一帯の、アラガミの撃退と素

材の回収だが……それらはすべてここ前線基地と、来るべき『エイジス計画』を成就するための資源となる」

「この数値は……！」

「……エイジス計画とは……簡単に言うと、この極東支部沖合——旧日本海溝付近に、アラガミの脅威から完全に守られた『楽園』を作るといふ計画なのだが……」

「ほほおっ！」

「この計画が完遂されれば、少なくとも人類は、当面の間絶滅の危機を遠ざけることができるはず……」

「すごい！　これが新型か！」

「ペイラー……説明の邪魔だ」

先ほどから感嘆の声をあげているサカキ博士に、支部長はまた呆れたような視線を向けた。——もっとも、サカキ博士はまったく気づいていないようだ。

「ゴメンゴメン。ちょっと、予想以上の数値で舞い上がったんだ」

子供のようにはしゃぐサカキ博士から目をそらして、支部長は肩をすくめて見せた。それを見て、スイウも苦笑する。

「まあ……ともあれ、人類の未来のためだ。尽力してくれ」

「はい」

どうやら支部長は、ツバキよりも穏やかで話しやすい人物のようだ。サカキ博士も、まあ、面白いので、安心する。

「じゃあ私は失礼するよ。ペイラー、あとはよろしく。終わったら、データを送っておいてくれ」

「おーけー」

支部長はもう一度サカキ博士を呆れた目で見やり、サカキ博士の研究室を出ていった。

「——よし、準備は完了だ。そのベッドに横になって」

「……はい……」

「ははっ、安心なさい。私はロリコンじゃないんでね」

「っ……!」

キッと睨みつけると、サカキ博士はにやにやと「冗談さ」と笑った。

「少しの間眠くなると思うが、心配しないでいいよ。次目が覚めるときは自分の部屋だ」

ベッドに仰向けに寝て、スイウは目を閉じた。

「戦士のつかの間の休息、というやつだね。予定では、一〇八〇〇

秒だ。ゆっくりおやすみ」

……

「何の用だ、ペイラー」

ノックもなしに部屋に入って来たサカキ博士に、支部長は振り返りながら訊ねた。

「新型くんのメディカルチェックが終わったから、結果を持ってきてあげたんだよ。ありがたいだろう？」

「わざわざ直接持つてこなくても……データを送ってくれと言ったろう？」

「いやあ……実は、いろいろと興味深い結果が出てね」

サカキ博士の差し出してきた用紙を受け取って、内容に目を通した。その一角に目を留めて、呟く。

「やはり……そうか」

「ああ。身体能力や思考能力は問題ない……というよりも、他の人材よりもずば抜けてるから……その分もつたいない気がするね。しかも原因がアレだから、解決しようと思っても、なかなか出来ることじゃない」

「しばらくは大変だろうな」

「そんなものだろう？　このご時世、誰だって辛い過去を抱えてるものさ」

「そうだな……」

もう一度メディカルチェックの結果を眺めて、シックザール支部長は長い溜息をついた。

六花

目を覚ますと、サカキ博士に言われた通り自室にいた。何をすればいいか分からないので、とりあえずツバキを捜しに行こうとエントランスに向かう。

「ひゃっ？」

「おっと」

区画移動用エレベーターからエントランスに下りようとして、逆に入ろうとしていた女性とぶつかった。体重の軽いスイウは後ろに尻もちをついて、扉の閉まったエレベーターに逆戻りする。

「ごめんね……って、あれ？　もしかして、『新型』の人？」

「え、あ……はい」

差しのべられた手を握り返して、スイウは立ち上がった。――が、すぐに手を離す。

「私、楠リツカ。ここの整備班に所属してるんだ」

「神矢スイウ、です……　よろしくお願いします」

名乗ったところで、エレベーターの扉が開いた。エントランスに戻ろうとすると、フロアに出たリツカに手招きされる。

「ねえ……　ちょっと、お話しない？」

「え……でも、」

「部屋でココアでもどう？ 最近の外部居住区の配給じゃ、なかなか手に入らないでしょ？」

「本当ですかっ？」

そういえば最近、ココアを飲んでいない。フェンリルからの配給は最低限の物資や食糧だけなのが大半なので、甘いものにお目にかかることは滅多にないのだ。

ココアに釣られたスイウは、リツカに連れられて廊下を歩いていき、部屋に招き入れられた。質素なソファに座らせて、テーブルに置かれたマグカップに手を伸ばす。

「いただきます！」

ふうふうと息を吹きかけて冷ましているスイウを見て、リツカはにこにこ微笑んでいた。手作りらしいクッキーも出してくれて、それにもスイウは勢いよく飛びつく。

「おいしい？」

「はいっ。……このクッキー、リツカさんが作ったんですか？」

「あはは、私はこんなおいしいの作れないよ。これは、防衛班の台場カノンさんからもらったんだ。カノンさん、お菓子作り上手だから」

「へえ……すごいですね」

そんなことを話している間に、すでにクッキーは半分以上が消えていた。リツカは数枚しか食べていないから、他はスイウが食べたということになる。

「……どうしたんですか？」

リツカがずっとスイウを見つめているのに気づいて訊ねてみたが、反応がないのもう一度呼ぶと、リツカはようやく気づいたようだった。

「ああ、いや……可愛いなあ……って」

「………」それを聞いて、スイウは一瞬の間の後首をかしげる「……え？」

「だってスイウちゃん、女の私から見ても可愛くて……」

「あ、あの、リツカさん？」

スイウ……”ちゃん”？

「ボク、男ですよ……？」

その発言に、今度はリツカが固まった。

「……は？」

「ボク、男です」

「……………」

「……………」

——ああ……やっぱり、間違えられてた……

……

「……いや……なんか、ごめんね？」

「いえ……こんな外見なのが悪いんです……」

自分の性別が男であることをなんとかリツカに説明し終わると、スイウは大きな溜息をついた。さすがにもう慣れてきたが、十六歳の男子としてはちょっと悲しい。

「——ところで、スイウくん」

「何ですか？」

「何歳？」

「え……十六歳ですけど」

「へえ……もっと年下かと思ったけど、私とそんなに変わらないじゃない」

「……？」

そういえばリツカは何歳なのだろう？ 見たところスイウと同じくらいだが、女性に年齢を訊くのは気が引ける。十七、八歳くらいだろうか。

「大して歳は変わらないんだし、別にタメ口でいいよ？ 名前も呼び捨てでさ」

「いや、それは……」

自分よりも年上の——しかも、所属する班が違うとは言っても先輩の——人を呼び捨てにするというのはなかなか……

「対等な立場で喋ってた方が気楽でいいでしょ？」

「んー……」

それでも頷かないスイウに、リツカは奥の手を使った。

「ちゃんとタメ口使ってくれたら、カノンさんにクッキー頼んでもいいよ？」

「……！」

「そういえば、今度ケーキを作るとか言ってたなあ……」

「うつ……！？」

「しょうがない、全部二人だけで食べちゃお——」

「リツカさ……リツカ！ 待って！」

テーブルに身を乗り出して、慌てて呼んだ。——にやりと笑ったリツカに気づいて、またもや甘いものに釣られてしまったことを知る。

「ふふっ……やっぱり可愛いなあ」

リツカに頼ったをつんつんされながら、スイウはしばらく固まっていた。

悪鬼の尾

スイウがフェンリル極東支部に入隊して、数日が経った。一通りの訓練を終えて、神機の扱い方も覚えた。今日はこれから、初の任務だ。

——まあ、簡単な内容らしいが。

「……はあ……」

思わず溜息をついた。最初だから簡単なのは当たり前だろうが、どうしても焦りを感じてしまう。今まではできなかったが、神機使い——しかも、「新型」——になった今なら、できるはずだ。

——あのアラガミを、殺して……

「あ、リンドウさん」

オペレーターの竹田ヒバリが、今回スイウと任務を行う先輩ゴツドイーターの名前を呼んだ。スイウも椅子から立ち上がり、そちらを見る。

「支部長が、見かけたら顔を見せに来いと言っていましたよ？」

「オーケー。見かけなかったことにしといてくれ」

そんないい加減なことを言いながら、先輩であり同じ第一部隊に所属する男性が歩いてきた。

「よう、新入り。……あ、自己紹介がまだだったか？」

「はい」

「俺は『雨宮リンドウ』——形式上、お前の上官にあたる……が、まあめんどくさい話は省略する」

「え、と……ボクは……」

「神矢スイウ、だろ？　ここじゃ最初の『新型』だからな。お前、結構有名だぞ？」

「はぁ……」

「まあ、そんなに緊張するな。とりあえず、とつと背中を預けられるぐらいに育ってくれ。——な？」

と、そんな風に自己紹介を終えて任務の内容を確認しようとして、

「あ、もしかして新しい人？」

結構露出の多い服装に身を包んだ女性が歩いてきた。リンドウの横に並んで、スイウに「本当に男の子？」と訊ねてくる。

「あー……今厳しい規律をたたき込んでいるんだから、あっち行つてなさいサクヤくん」

「了解です、上官殿」

サクヤと呼ばれた女性は、おどけた様子で言い、スイウに手を振

って去っていった。その後ろ姿が見えなくなったのを確認して、リンドウが溜息交じりに先に進める。

「とまあ、そういうわけで……だ。さっそくお前には実戦に出てもらうが、今回の緒戦の任務は俺が同行するから安心しろ。実戦の雰囲気味わってくれば、それでいい」

「……はい」

その指示に少し不満がないわけではなかったが、反論するようなこともない。おとなしく頷いた。

「……と、時間だ。そろそろ出発するぞ」

悪鬼の尾

今回の任務の内容は、オウガテイル一体の討伐。

オウガテイルは小型のアラガミだ。場所は、「贖罪の街」

「よし、スイウ。実地演習を始めるぞ」

そしてリンドウは、スイウに向けて指を三本立てる。

「命令は三つ。死ぬな。死にそうになったら逃げる。それで、隠れる。運が良ければ、不意を突いてぶっ殺せ」

普段のおどけた感じとは違い、真剣なまなざしで見つめられてス

イウは少したじろいだ。

「——あ、これじゃ四つか？」

真剣なもの一瞬だけで、リンドウはまた明るい感じで言う。そのギャップに、スイウはクスクスと小さく笑ってしまった。

この三つの命令が、一生忘れられないものになるなんて知らずに。

「ま、とにかく生き延びろ。それさえ守れば、あとは万事どうにでもなる」

「はいっ！」

元気良く返事したスイウに驚いたようだったが、リンドウは笑って「贖罪の街」を見た。

「さーて、おっ始めるか！」

……

そのアラガミは、二人を見つけると牙を振りかざして威嚇してきた。

白い体躯の、鬼の顔のような尾を持つ二足歩行のアラガミ。比較的小型の部類に入るが、普通の人間なら為すすべもなく捕食されてしまう。現在もつとも個体数が多いといわれていて、集団での行動が頻繁に見られる——が、今回は一頭のみだ。

「今回はお前が前衛だ。危なかったら助けてやるが、気をつけるよ」

「はい！」

スイウはショートブレードの「ナイフ」を構え、オウガテイルに向かって駆け出した。尻尾をバネのように折り曲げて飛びかかって来たオウガテイルを横にステップしてかわし、振り向くと同時に突き出した。ステップを踏みながら連続で突き刺し、ジャンプして斜めに斬り払う。

「ガアアア！」

オウガテイルが連撃にのけ反った。スイウは攻撃の直後にステップ——「アドバンスドステップ」で距離を取る。

「よしっ……」

出だしは順調だ。このまま一気に片を付けようと地面を蹴り、縦に剣を振るう。だが、

「うあっ……！？」

オウガテイルが身体ごと横に回転し、尾で周囲を薙ぎ払った。無防備な腹部を直撃し、跳ね返される。地面を転がって立ち上がると、リンドウの指示が飛んだ。

「焦るな。もつと慎重に行け！」

その声にすぐに反撃に出るのを止め、オウガテイルの動きを見た。

オウガテイルは尻尾を振り、そこについている針のような突起を飛ばしてくる。スイウは装甲の「対貫通バクラー」を展開し、それを防いだ。

遠距離攻撃を防ぐと、スイウは剣形態から銃形態に神機を変形させた。アサルトの「50型機関砲」を構え、「トモシビラピッド」連射する。アサルトはどんな弾種でもオールラウンドに使用できる突撃銃で、速射性能に優れている。

「ガ、ア……アアアア！」

バラけて連射された火属性の弾丸が、一斉にオウガテイルに降り注ぎ炸裂した。堪らず転倒したオウガテイルに接近し、神機を再び剣形態に変形させた。

起き上がろうともがいているオウガテイルに向けてナイフを構え、神機が捕食形態に変化した。刀身が縮み、黒い顎あぎとが現れる。

「喰らえ！」

捕食に成功した。バーストモードになり、一時的にだが身体能力が跳ね上がる。起き上がったオウガテイルを連続で斬りつけてアドバンスドステップで距離を取り、銃形態に変形させてエイムモードで狙いを定める。装填したパレットは、オウガテイルから捕食した「貫通二ードル」

飛びかかろうと尾を折り曲げたオウガテイルを、先ほどオウガテイルが放った針と同形の弾丸が貫いた。自らと同じ棘に貫かれ、そのままオウガテイルは動かなくなった。

「……ふう……」

「ご苦労さん」

これまで離れた場所にいたリンドウが、自分の神機を肩に担いで歩いてきた。オウガテイルの屍骸を指差して言う。

「ほれ、まだ仕事が残ってるぞ。貰っとけ」

「はい」

言われて思い出し、スイウは神機を剣形態に変えた。動かなくなったオウガテイルを捕食し、その素材をとる。

「——まあ、最初にしては上出来だったろ。期待してるぞ、『新型』」

「……あのう」

「ん？」

「その……みんなから『新型』って呼ばれるんですけど、ちょっと……」

「そうか。じゃあ……」

リンドウはしばらく思索するそぶりを見せて、それからスイウを見てにやりと笑った。——リッカも同じような表情をしていた気がする。

「スイウ”ちゃん”でどうだ？」

「嫌です！」

……

「リンドウ」

スイウとの任務を終えてアナグラに戻ったリンドウを、ツバキが呼び止めた。

「歩きながらビールを飲むのはやめると、いつも言っているだろう」

「そんなお固いこと言わないで下さいよ、”姉上”」

「ここでは姉上はやめろ。私はあくまでお前の上官だ」

そんなやりとりをしながらも、リンドウには話の本題は分かっている。空になった缶を握りつぶしてゴミ箱に放り、報告する。

「特に問題は無かったよ。むしろ優秀なくらいだ。……それに、『新型』の戦い方も見れて参考になったしな」

「そうか。だが……」

「分かってる」

リンドウは煙草に火を点けながら、少し沈んだ口調で言う。

「あいつも含めて、全員俺が守ってやるよ。——それが、あいつへの罪滅ぼしだ」

煙を吸い込み、吐き出した。ついでに、この暗い気持も全部吐き出せたら——と思うのは、いつものことだ。

「ま、生き延びりゃあ何とかなるだろ」

破戒の蘭

オウガテイル討伐の翌日。スイウは「嘆きの平原」に来ていた。二日連続の任務だが、やはり難度は低い。

スイウが到着すると、先に来ていた神機使いは笑顔で出迎えた。

「この前の新人さんね？ スイウくんだっけ」

「はい、今日はよろしくお願いします。……えっと……」

「私は『橘サクヤ』。よろしくね」

サクヤはスイウの頭を撫でてきた。なんだか子供扱いされている気が……

「っ……?!」

——……ウ……スイウくん……

「どうしたの？」

「へ？ あ、いえ、何でも……ないです」

「？」

チラついた記憶の断片を頭の奥に追いやり、スイウはサクヤに向き直った。それにしても、露出が多い服装だ。

「ちょっと緊張してる?」

「……はい……」

いろんな意味で。

「肩の力抜かないと、いざというとき身体が動かないよ」

今度は頬をつつかれた。完全に遊ばれている感じがする。

しかし、すぐに表情を切り替え、サクヤは目の前に広がるフィールドを見渡した。

「じゃあ、ブリーフィングを始めるわよ」

今回の任務は、コクーンメイデン二体。フィールドは嘆きの平原。

コクーンメイデンは、前回のオウガテイルと同じく小型のアラガミだ。その特殊な点は、地面に張り付いて移動しないということ。だが、対遠距離用の高速弾や対近接には体内に棘を備えているなど、油断はできない。

「今回の任務はキミが前線で陽動、私が後方からバックアップします。遠距離型の神機使いとペアを組む場合、これが基本戦術だからよく覚えておいて。くれぐれも先行しすぎないように、後方支援の射程内で行動すること。……OK?」

「はい」

「うんっ、素直でよろしい!」

サクヤはショートヘアの黒髪を揺らしてフィールドに降り立った。
「さあ、始めるわよ」

破戒の繭

嘆きの平原の地形は、ドーナツ状になっている。反時計回りに歩き始めてすぐ、標的を一体発見した。

「避けて！」

コクーンメイデンは、頭部の器官からレーザー型のオラクルを撃ちだしてきた。それを左右に別れて回避し、スイウは「ナイフ」を、サクヤはスナイパーの「ステラスウーム」を構える。

コクーンメイデンは、接近してきたスイウに注意を向けた。ゆっくりと回転してレーザーを撃つが、スイウは前方にステップし背後に回り、ナイフを横に振り抜く。連続で斬りつけているところに、サクヤによる狙撃が入った。すれすれを通り抜けたレーザーに肝を冷やしながらも、一連の動作を終える。

「ふっ」

コクーンメイデンの動きを見て、短く息を吐いてスイウは後ろに跳んだ。体内の骨のような器官を変形させた棘が飛び出してきて、それを紙一重でかわす。続いてレーザーで狙ってきたが、狙いを定める速度は

「遅い！」

サクヤの射線に重ならないように接近し、連続攻撃を見舞う。続いて動きを止めたコクーンメイデンを捕食し、バーストモードになった。捕食で奪ったアラガミパレットは「ジャベリン」だ。

しかし、このパレットはまだ使わないことにして、剣形態のまま攻撃を再開する。身体能力が強化されている状態での連続攻撃により、コクーンメイデンはすぐにまた動きを止める。その隙にもう一度捕食して、一体目を倒した。

「結構いい動きをするじゃない。リンドウが褒めてた通りね」

「いえ、別に……」

「ふふ。照れちゃって、可愛い」

「……………」

と、そんなやり取りもほどほどに、二体目を探して移動を始めた。ちょうどドーナツを半周した辺りで発見する。

「ねえ。今度は銃形態での戦い方も見てみたいんだけど、いい？」

「いいですよ」

50型機関砲を構えて狙いを定め、ラピッドを連射する。パレットを撃つにはオラクルを消費しなければならないので、連続で使うには限りがある。新型神機を使うスイウは、剣形態で攻撃すること

で、銃形態で消費したオラクルを回復できる。

剣形態に戻し、サクヤの援護射撃を活かして狙われることなく背後に回り込んだ。二回連続の突きから斬り払いに繋げる。

「……つと」

突然突き出された棘をステップでかわし、すぐにまた接近して斬りつける。しかし、コクーンメイデンも連続で棘を出してきた。

「つつ……！」

身体をひねってかわすが、棘の先端が頬をかすめた。赤い雫を視界の隅に捉えながら、さらに踏み込んで突きを繰り返した。反撃の暇を与えず、ただ斬り続ける。

もっと、速く。

——……スイ……イウ……

深く集中していくのが分かった。だんだん周囲の音が遠のいていく。意識が研ぎ澄まされて、知覚の加速が始ま——

「スイウ！」

「！」

気がつくと、コクーンメイデンはすでに動かなくなっていた。それどころか、あちこちを深く切り裂かれて悲惨な有様である。どうやら、決着がついたことに気づかったらしい。

「どうしたの？ 呼びかけても反応がなかったし、何かあったのか
と思ったじゃない」

「……………すいません……………」

「？ ……まあ、無事終わったからいいか。じゃあ、帰りながら今
回の反省を……………」

サクヤについて歩き始めて、右手に違和感を感じた。すぐに右腕
全体に悪寒が走る。

「……………スイウ？」

「っ……………う……………あつ、ああ、ああああっ！！」

右手に激しい痛みが走り、神機を掴む手を離れた。地面に転がっ
た神機の横に膝をつき、痛みに叫びをあげる。

「ちょっと、スイウ！ 一体どうしたの！？」

サクヤに抱き起こされたが、痛みに意識が薄らいでいく。

「スイウ！ しっかりして！」

サクヤの声が聞こえたが、それも遠のいていった。深い過去の闇
に飲み込まれるように、スイウは意識を失った。

適合率

目の前に転がっているこれは、何だろう？

そこにも、あっちにも、ボクの後ろにも、転がっている。

風はなく、■の匂いが流されることなく充滿している。赤く染まった、●●の××。▲▲の——た、もとは●●だったはずの××……

「っあ……!!」

悪夢から覚めて跳ね起きると、病室のベッドの上だった。動かそうとした右手に痛みを感じ、見てみると包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「……大丈夫？」

声に顔を上げると、サクヤが心配そうにこちらを見つめていた。

「……はい……」

「そう、よかった。いきなり倒れたからびっくりしたよ」

サクヤは微笑んだが、スイウはまだ苦しげな表情を浮かべていた。酷く呼吸が乱れて落ち着かない。左手で胸を押さえてうずくまる。

「……手の怪我、どのくらい酷いんですか……？」

「ああ、うん。すぐに復帰できるだろうって言ってたよ」

——ウ……………て……

「っ……………」

悪夢の続きなのか、記憶の断片が頭に蘇って来た。苦しげに呻く姿を見て心配したサクヤが声をかける。

「本当に大丈夫？ 念のため、もう一回検査受けておいたら？」

「いえ…………平気です。…………！」

右腕が痛み、それを左手で抱きしめて痛みに耐える。そこに、サクヤの指先が触れた。

「ねえ、スイウ——」

——ねえ、スイウ…………

「——何か困ってたりしたら、遠慮なく相談していいからね？」

——何か辛いことがあっても、一人で抱え込まないで…………

「私たちは、仲間なんだから——」

——私たち、二人だけの家族でしょ？

「——助け合うのは、当然でしょう？」

——助け合わないきゃ…………

——助け…………

——助けて、スイウ……！

「やめてっ！」

「！」

スイウは耳をふさいで悲鳴を上げた。突然突き飛ばされたサクヤは、驚いて目を見張っている。

「スイウ……？」

今にも泣き出しそうなスイウに、サクヤは何と声をかければいいのか分からなかった。

「……ごめんなさい……」

しばらくして、ようやくスイウは消え入りそうな声で呟いた。

「今日は、しばらく一人にさせて下さい……ごめんなさい……」

「あ、うん……じゃあ、またみんなと来るから。リンドウとかがいると、元気出るかも」

そんなことを言いながらサクヤが立ち上がると、扉をノックする音が響いた。

「はい。……あ、博士。それにリツカも」

「やあやあ、お取り込み中だったかい？」

「いえ……私はもう帰るので……」

「ふむ、そうかい？ それなら都合もいい」

「？」

首を傾げながらも、サクヤは病室を出ていった。入れ替わりにサカキ博士とリツカが入って来て、リツカはベッドのわきの椅子に座る。サカキ博士は壁際に立った。

「サカキ博士……何ですか？」

「ああ、うん」サカキ博士は手元の書類をめくりながら言う。「キミの怪我……というか、神機とか過去のこととかについてね」

「昔のこと、広まってませんよね？」

「うん、大丈夫だ。詳しく知っているのは、私とヨハン、それからツバキくんだけだからね。リツカは知らないから、その話をするときには席を外してもらおう。……じゃありツカ。スイウくんの怪我と、神機について頼むよ」

「私ですか？」

「整備士だろう？ それに、大切な友達のことじゃないか」

「……分かりました」

リツカは資料を受け取り、それに一瞬目を通した。そ小さく溜息をついて、スイウに訊ねる。

「神機の適合率のことなんだけど……スイウは、自分と今の神機の適合率はどれくらいだと思う？」

「……分かんない」

「見て」

リツカの差し出してきた用紙を見ると、数値やグラフがいくつも載っていた。そのうちの一箇所を指差して言う。

「データベースの情報では中の上って感じだったんだけど……ほら、ここ」

グラフの数値がずば抜けているところが幾つかある。その最初は

「——適合試験……」

「うん。適合試験……正確には、そのすぐ後のメディカルチェックのときの数値だけど……異様に高い。この時だけなら、ソーマさんに匹敵するよ」

「ソーマ……？」

聞き覚えがあるような気がして、すぐに思い出す。アナグラに來てから、時々噂を耳にしたことがあった。

「そして、サクヤさんとの任務の後……怪我の治療と一緒に、いろいろ検査したんだけど……このときは、適合率が大きく下がってる」

「じゃあ……」

「怪我の原因はそれだね」サカキ博士は、書類に目を落としたまま言う。「適合していない状態で神機との接続を行うと、神機のオラクル細胞に捕食されてしまう。それと同じことが起きかけたんだろう」

スイウは包帯で巻かれた右手に目を落とした。自分の身体が捕食されている様子を想像し、寒気が走る。

「どうする、スイウくん？ 一応また検査はするけど、心配ならしばらく休暇を取ってもいいだろう」

「それはダメです！」

「！」

「おおっ！？ びっくりした……いきなり大声を出さないでくれよ」

「あ………すみません」

つい大声を出してしまった。まだ実戦に二回しか出ていないというのに休暇というのは、是が非でも避けたい。少しでも早く強くなつて、勝たなければならぬのだ。

今もまだ縛りつけてくる、暗い過去の鎖――

「まあ、本人が大丈夫と言っているんだし、簡単な任務なら平気だろう。今度はたぶん、ソーマあたりと一緒に任務に赴くことになるだろう」

……

次の任務。博士の言った通り、スイウはソーマと同行することになる。

そして、噂を思い出した。

鉄の雨

「あ、スイウくん。怪我治ったんですね」

「うん」

神機との適合率が元に戻り、手の怪我もある程度治ったので、ヒバリのもとに任務の内容を確認しに行った。今回の任務の内容は、オウガテイルとコクーンメイデン計四体の掃討である。

「今日は、ソーマさんとエリックさんとの任務です。二人とも、先に『鉄塔の森』へ向かいましたよ」

「ん……ソーマさんってどんな人？　ボク、会ったことないんだけど」

「え、と……まあ、強い人です」

「？」

強い人とだけ言われてもピンとこない——が、それは置いておいて、ヒバリに対して気になっていることを言う。

「ところで、なんでヒバリちゃんは丁寧語なの？　ボクより年上なのに」

「え？」

リツカ同様、ヒバリにもタメ口で話すように言われたのだが、し

かしヒバリ自身がタメ口どころか年下に丁寧語である。

「普段なら普通に喋りますけど、オペレーターとしてここにいる間は誰にでも丁寧……って決めてるんです」

「ふうん？」

スイウは小首を傾げたが、先輩たちをあまり待たせてはマズい。ヒバリに手を振って、スイウは今回のフィールドである「鉄塔の森」に向かった。

鉄の雨

スイウが到着すると、ダスキーモッツを着てフードを被った少年と、チェリーズベストを羽織った赤髪にサングラスの少年が待っていた。スイウに気づいて、赤髪サングラス——エリックが駆け寄ってくる。

「お、キミが例の新人クンかい？ 噂は聞いているよ」

「あ……初めまして。スイウといいます」

「僕はエリック。エリック・デア''フォーゲルヴァイデ。キミもせいぜい僕を見習って人類のため華麗に戦ってくれたまえよ」

「はあ……」

ジェスチャーを交えてナルシストっぽく話すエリックに、スイウ

はどうやって対応すればいいのかわからなかった。

「エリック、上だ！」

唐突に危険を告げる声が聞こえた。それまで黙っていた少年——ソーマが、バスターブレード「イーブルワン」を構えて駆け寄ってくる。危険に気づいたスイウは後ろに跳ぶが、エリックは状況が理解できないでいた。

「？ ……うわあああつ！！」

死角から跳びかかって来たオウガテイルが、エリックに喰らいついた。

「ひっ……」

スイウは思わず手で口元を押さえ後ずさった。一飲みにされたエリックは、わずかに血の雫を散らして跡形もなく消えた。

「ボーっとするな！」

立ちすくむスイウに叱咤しながら、ソーマが「イーブルワン」を振り抜いた。

……

「……ようこそ。クソったれな職場へ……」

エリックを捕食したオウガテイルの屍骸を前に、ソーマは憎々しげに呟いた。まだ地面にうずくまって震えたままにいるスイウに冷たい視線を向けて言う。

「言つとくが、ここではこんなことは日常茶飯事だ」

「……っ！」

神機をスイウに向けて、ソーマは訊ねてくる。

「お前は、どんな覚悟を持って『ここ』に来た……？」

覚悟……？

そんなの、決まってるじゃないか……

「——なんてな……。時間だ、行くぞ新人^{ルキ}」

歩き始めようとして、一度足を止めてソーマは忠告してきた。

「……とにかく死にたくなければ、俺にはなるべく関わらないことだ……」

……

アラガミたちは、突然地中から現れた。オウガテイルは二人を威嚇し、段差の上に張りついているコクーンメイデンは狙いを定めようとゆっくり回転する。

「俺が先にコクーンを潰して接近戦に持ち込む。お前はそれまで生き延びてろ」

そう言つてソーマは段差に飛び乗り、コクーンメイデンに向かつて神機を振り始めた。一方スイウは、オウガテイル二体を相手に剣形態で応戦する。

「っっ……」

噛み付いてきた一体の牙を装甲で防ぎ、ジャンプして空中から狙う。一体目の奥にいた二体目の身体を貫き、着地後すぐに反転して斬りつける。数回斬つて、攻撃されていない方からの攻撃が来る前に距離を取る。

「ガア！」

尻尾をバネに飛びかかつて来た一体は、スイウを飛び越えて反対側に着地した。前後を挟まれた状態になってしまう。

「——えいつ！」

スイウはスタングレネードを取り出し、足もとで炸裂させた。短く閃光が走り、オウガテイルが悲鳴を上げて動きを止める。スタングレネードは、アラガミの動きを止めることができる道具だ。これまでよりも敵の数が多いからと、リツカから少しだけ貰っていた。

オウガテイルが動きを止めている間に神機を銃形態に切り替え、トモシビラピッドを連射する。至近距離からの連続攻撃に、ダメージを積み重ねていた一体が倒れる。スタングレネードの効果から回

復した方の攻撃をかわして、倒れているほうに二連続の突き、斬りつけ、「アドバンスドジャンプ」で間髪をいれずにジャンプからの刺突。

「よしっ」

立ち上がってすぐ、オウガテイルは再び転倒して動きを止めた。しかし、スイウが攻撃に移る前にもう一体が棘を放ってくる。とっさに「対貫通バックラー」を展開して防ぐが、後ろに流される。

「そいつを倒せ。こっちは俺が潰す！」

コクーンメイデン二体を倒し終えたソーマが、まだ体力の残っているほうに肉薄した。「イーブルワン」を横に薙ぎ払い、「ナイフ」よりも重量のある一撃がオウガテイルを捉える。

「喰らえっ……！」

スイウは起き上がりかけているオウガテイルの捕食に成功した。「貫通ニードル」を手に入れ、同時に身体能力が強化される。連撃を叩きこむと、オウガテイルは呻くように鳴いて動かなくなった。ソーマに加勢しようと銃形態に切り替える。

「ソーマさん！」

アラガミから捕食して奪い取った「アラガミパレット」は、仲間を受け渡すことで強化できる。これは「新型」にしかできないことだが、仲間を一時的に強化するのにも使える。受け渡し弾は光の尾を引きながら、急な弧を描いてソーマに当たった。捕食による通常のバーストモードよりも強力な、「リンクバースト」が発動する。

スイウはスタングレネードを使って、オウガテイルの動きを止めた。ソーマは「イーブルワン」を構えて力を溜め、チャージクラッシュを叩きつける。オウガテイルは頭部をひしゃげさせて地面に倒れた。

「……………はあ……………」

これで任務は終了だ。緊張の糸が切れたスイウはその場に座り込んでしまった。

「おい、新入り」素材の捕食を終えたソーマが歩いてきた。「さつさと帰るぞ」

「はい」

ソーマの後ろについて歩きだした。しばらく互いに無言だったが、ソーマがポツリと呟く。

「辞める気はないのか？」

「え？」

「こんな『死』と隣り合わせの仕事なんて、馬鹿げてるだろ？」

ソーマは振り返り、フードの奥からじつと見据えてきた。

「さつさと辞めちまった方が身のためだ。……………それに、お前もエリックみたいになんたくなかったら……………俺には絶対に近づくな」

任務を始める前と同じようなことを言って、それからソーマは何も喋らなかった。

仲間

ソーマとエリックとの任務からアナグラに帰ったスイウは、自室に戻る。肉体的にも精神的にも、辛い。

——しかし、貴重な睡眠を妨害する者がいた。

「よっ！ 起きてる？」

「……今、寝ようとしてたんだけど……？」

ノックもしないで勝手に部屋に入ってくると、スイウと同期の神機使い藤木コウタはソファに座った。テーブルに置いてある皿から、カノンからもらったクッキーを手取る。

「これ、食べていい？」

「一度に食べちゃダメだからね」

コウタに食べつくされてしまつては困るので、スイウも起き上がってクッキーを食べ始めた。しばらく黙々と食べ続けて、コウタがポツリと呟く。

「聞いたよ……同行してた人が亡くなつたって」

「……………うん」

「そっかぁ。うーん……まあ、ここで二人で暗くなっても、どうし

ようもないことだと思っただよな……」

最後の一枚を咀嚼して、コウタは言った。それから立ち上がって、初めて会ったときのように明るく笑う。

「まあ、大丈夫だよ。自信持とうぜ！ 根拠無しに決めてるからっ！ 無敵っしょー！」

「……うん……そうだね」

スイウも弱弱しく笑い返した。

明るく笑っているコウタを見て、羨ましく思う。

「ふふっ……コウタくんは、強いよね」

「……………へ？」

「うっん。何でもない」

きつと、この先——何があるかは分からないけれど——コウタは、力になってくれる。そんな気がした。

……

翌日。コウタに言われて、スイウはリンドウの部屋を訪れていた。ベテラン区画の一室で、リンドウは朝からビールを飲んでくつろいでいた。

「よお、スイウ。……目の前で仲間が死ぬのは初めて、か。……新人には、ちよっと辛かったな……」

「はい。……でも、大丈夫です、たぶん……。コウタくんが励ましてくれたし」

「ああ……お前の同期は本当にいい奴だなあ。このご時世に、よくもまああんなにまっすぐ育ったもんだ。親御さんの教育の賜物なのかね」

差し出されたビールを丁寧に断りながら、スイウも同意する。

「コウタくん、すごくいい人です。いつも明るいし、心が強いっていつか……まあ、勝手にお菓子食べちゃいますけど」

「ははっ。気の合う仲間は、本当にかげがえのない宝だ。大事にするよ？ そうだな……コウタもお前も、技術はまだまだが……まあ、しばらく生き延びてりゃいい線いきそうだ」

「本当ですかっ？」

「ああ」

リンドウはニヤツと笑うと、スイウの頭を撫でてきた。少し乱暴だが、優しく、くしゃくしゃと撫でる。

「……えへへ」

ちよっと恥ずかしいが、でもやっぱり褒められるのは嬉しい。

「期待してるから、とにかく死ぬなよ。……いいな？」

「はいっ！」

リンドウやコウタと一緒になら、きっと生き延びられる。スイウはそうやって、信じている。

金剛の巨魁

二日後。精神的にも復活したスイウは、ヒバリと次の任務について話すためにエントランスにやって来た。

「今回は、コウタくんとのお任務です」

「コウタくん？」

「はい。最近姿を見せてなかったんですけど、『コンゴウ』が現れました。討伐をお願いします」

そうやって話していると、いつも通りの明るい笑顔でコウタ現れた。

「お、今回はスイウと一緒に？ ……そういえば、一緒に任務に出るのは初めてだね。よろしく！」

「うん」

「お互い無事で何よりだね！ 命あつてのこの商売だからねえ。オレも何かあると、母さんも妹も路頭に迷っちゃうから、気をつけないとな……」

「……そうだね」

守るべきものがあるのは、とても羨ましい。

——ボクにはもう、何も無いから……

「スイウ？」

「ん……何？」

「いや、何ていうか……ちょっと怖い顔してたよ？」

「え、そう？」

「うん、笑って笑って。——おっ、やっぱりそうやって笑ってる方が可愛いよ」

「……ボク、男……」

「ははっ、分かってるよ」

あ、そうだ……とコウタが続ける。

「サクヤさんって知ってる……よね？」

「うん。この前、一緒に任務に出たよ」

「あの人ってなんかいいよね？ 美人だし、感じもいいし、強いしさ——戦うお姉さんって感じでさ、たまらないよなー！？」

「え、あ……うん……？」

コウタのテンションが一気に上がっているように見える。——なんだか、ちょっと興奮してる感じ……

「よおoshi！　なんかテンション上がったなあ！　今回の任務、どっちが多く倒すか勝負しようぜ！　サクヤさんにいいところ見せてやるぜ！」

「えー？」

「ほらほら、早く行こうぜ。負けた方が、今度飯を奢るってことで！」

肩を組んで走り出した二人を、ヒバリは微笑んで見ていた。

金剛の巨魁

今回の任務のフィールドは「鎮魂の廃寺」——神仏にすぎる人々が静かに暮らしていた隠れ里である。生活の中心にあった御堂はアラガミの襲撃によって半壊状態になっていて、屋内には雪が降り積もっている。

「……なんか、怖いところだね……」

「お？　もしかしてスイウ、お化けとか苦手なのか？」

「……………うん」

「やっぱ、女の子っぽいよなあ」

「そんなことないよー！」

フィールドを歩きながらも、二人は緊張を解いていた。辺りを徘徊していたオウガテイルは掃討したが、肝心のコンゴウが見つからないのだ。御堂の中も確認したが、いない。

「ねえ、そういえばさ。お母さんと妹さん、外部居住区にいるんだっけ？」

「うん。今度休暇が取れたらさ、お土産たくさん持って帰ってやるんだ」

「へえ……いいなあ」

家族が待つてくれている家があるというのは、やっぱり懂れる。

「スイウも来る？」

「えっ、いいの？」

「いいよ。母さんたちも喜ぶんじゃないかな」

階段を下りて左に曲がると、スイウの視界に何か動くものが映った。鈍い月明かりに照らされた雪景色の中、巨大な影が佇んでいる。

「待つて」

「うおっ？」

気づかない様子で進もうとするコウタを、襟を掴んで引きとめた。壁際に一度隠れる。

「あそこにいるよ」

「ん……？ あれがコンゴウか……何だよ、ただのデカくてガチムキの猿じゃん。近接戦に気をつければ大丈夫っしょ」

行くよと言って、コウタは段差に飛び乗った。コンゴウに狙いを定めて引き金を引き、アサルト「モウスイブロウ」から放たれた電撃が無防備なコンゴウの背に着弾する。

「フゴオオオオオ……ッ！！」

「来るよ！」

コウタの声と共に、コンゴウはコウタに向かって突進した。まだ気づかれていないスイウは影を移動し、段差の前で動きが止まった一瞬に襲いかかる。「ナイフ」を一段階強化した「ナイフ 改」の切っ先が、背中のパイプを連続で突き刺す。

「離れて！」

声に従って距離を取ると、コンゴウの背中で雷属性の爆発が起きた。モルター系のパレットは、重力に引かれて落下した弾丸が、着弾と同時に爆発するようになっていた。

「よっし」

コウタはコンゴウの弱点である雷属性のパレットを連射した。スイウも神機を銃形態に変え、背後からラピッドを連射して挟み撃ちにする。連続攻撃に耐えきれずに尻もちをついたところに、今度は剣形態に変えて接近した。

「やあっ！」

連続で斬りつけた後、空中からの突き攻撃。正面に回り込んで、顔を真横に切り払う。

「——うわっ……！？」

コンゴウの背中のパイプから発生した真空波によって、スイウは後ろに吹き飛ばされた。階段に背中から落下して、転がり落ちる。

「つつ……」

「スイウ、上！」

その声に反応して、バックラーを開いた。直後に衝撃が走り、後ろに身体が押し流される。跳びかかって来たコンゴウが起き上がる前に、コウタがスタングレネードを使った。

「大丈夫？」

「ごめん……ありがとう」

段差から下りたコウタの隣まで行って、回復錠を飲んだ。一つでは足りず、もう一つ。

「……真空波で遠距離も狙ってくるだろうから、気を付けて」

「おっけー」

二人は左右に別れて突進をかわした。コウタは先ほども距離を取って、スイウも深く踏み込まないように数発で離脱する。邪魔になる小型のアラガミたちは討伐済みなので、フィールドを広く使って安全に立ち回ることができる。

「止めるよ！」

今度はスイウがスタングレネードを使った。コウタとは反対側に周り、捕食する。バーストモードで、再び動き出すまでの間に最大の攻撃を叩きこむ。コンゴウが立ち上がるのと同時にパイプを切り裂き、結合崩壊させる。

「ナイス！」

コウタはコンゴウの突進をかわしてジャンプし、空中でモルターを撃った。顔面に着弾して、パイプに引き続いて結合崩壊を起こす。コウタは撃った反動で後ろに飛んで、段差に着地した。

「一気に畳みかけようぜ！」

「うん！」

やっぱりコウタは頼もしい。

この任務を無事に終える確信を抱きながら、スイウ凍えた大地を駆け抜けた。

講義

コンゴウ討伐を無事に終えたスイウとコウタは、その翌日、サカキ博士の研究室で講習を受けていた。モニターに表示された画像を指しながら、サカキ博士が語る――が、コウタは今にも眠りそうだった。

「ちょっと、コウタくん」

「んー……オレ、勉強って苦手なんだよねえ……」

「でも、ほら、大切なことだからさ。ボクたちはゴッドイーターなんだし、ちゃんと知っておかないと」

コウタが寝ないように見張りながら、スイウはサカキ博士の言葉に耳を傾ける。サカキ博士はコウタに訊ねようとしたが、眠りかけていることに気づいて苦笑した。代わりにスイウに訊ねる。

「『アーコロジ』という言葉をしているかい？」

「はい。えっと、たしか……『それ単体で生産、消費活動が自己完結している建物』を指す言葉……でしたよね？」

「その通り。そして、実はアナグラを中心としたフェンリル支部は、一種のアーコロジだといえるんだ。これって極端な話、ある支部を除いたすべてのフェンリル組織が滅んでも、残った支部は単独で生産、消費活動を行い、今まで通り生き残ることが可能ってことなんだよ」

モニターの画像が切り替わり、アナグラの構造を表した図が表示された。

「アナグラは地下に向かって食料や神機、各種物資の生産を行うプラントがあり、外周部には、対アラガミ装甲やキミたち優秀な神機使いをはじめとした、強固な防衛能力もある」

「それが……フェンリルの支部であり、人類を守るために最適化されたアーコロジー……」

「そう——ただ、そこにも問題はあって——それは、収納可能な人口に限りがあることなんだ」

「！」

そこで、今にも眠ってしまいそうだったコウタが目を見開いた。

「キミたちも知っている通り、この極東支部の周囲には、広大な外部居住区が形成されている。しかし彼らすべてを収容するだけの規模は、まだこの支部にもない。外周部に対アラガミ装甲壁を巡らすことが、今できる最大限の対処策なんだ」

「でも——」とコウタが疑問を呟く。「——それだけで足りるのかな。源に装甲は、頻繁に突破されてるんじゃない……？」

「だからそのために、ゴッドイーターの防衛班も配備されている」

そう言うってから、サカキ博士は気づいた。コウタを振り向いて頭を下げる。

「——いや、すまない。コウタくんのご家族は、外部居住区にいらんだったね。軽率な物言いを許してくれ」

「いえ、オレはただ……」

「本当はアナグラを地下に向けて拡大して、内部居住区を増やす計画もあつただけどね……」

「でも、その計画をより安全で完璧にしたのが『エイジス計画』なんだよね！」

コウタが元気よく身を乗り出して言った。やはり、暗く落ち込んでいるよりも、明るく元気な方が似合っている。

「そうだね。現状、極東支部の地下プラントの多くのリソースは、エイジス建設に割り当てられているんだ。……その話は、また今度にしようか」

サカキ博士はモニターを消した。

……

「あー……疲れたあ……」

サカキ博士の研究室を出て、二人はエレベーターに入った。コウタが伸びをしながら言う。

「朝っぱらから講習って、疲れるよなあ」

「仕方ないよ。ボクたち、新人だし。神機やアラガミについて勉強してよく知ることは、きつとゴッドイーターとして役に立つだろうし、ボクたちの力量が上がれば多くの人を守れ——」

「ああ、分かった。……スイウ、お前アレだろ？ ガキの頃にイタズラなんかしないでまじめに家の手伝いとか勉強とかしてたやつだろ？」

「えー？ そんなことないよ。ボクだってイタズラくらいはしたよ」

「へえ……どんな？」

「お姉ちゃんのお風呂を覗いたり」

「おおっ！」

「お風呂でお姉ちゃんに抱きついたり」

「おおっ！！」

「それからねー……」

スイウがもう一つ言おうとしたとき、エレベーターが新人区画に着いた。エレベーターを降りたコウタが、中に残っているスイウを振り返る。

「あれ？ 降りないの？」

「うん。これからちょっと、用事が……」

「ふうん……そっか。じゃ、また」

「うん」

スイウと別れて自室に戻り、配給のジュースを冷蔵庫から取り出し、ベッドに腰掛けて、一気に冷えたジュースを飲み干し、

「……そういえば」

コウタは小首を傾げた。

「あいつの家族って、どこに住んでんだ？」

樹希

講習を終えて、コウタと別れた後。スイウは、内部居住区を訪れていた。質素な部屋の中で、これまた質素な木製のテーブルの前に座っている。

「——ゴツドイーターの仕事はどう？ スイウ」

「うん。まあ、だいぶ慣れてきたかな」

霧島キキは、お茶の入った湯呑を久しぶりに会う幼馴染の前に置いて、自分は向かいの椅子に座った。

「仲がいい友達もできたし、先輩たちもまあ……基本的にはいい人たちだし」

「好きな人は？」

「まだ入隊したばかりだよ？ そんなのいるわけないじゃん」

「そう……よかったあ」

「？」

よかったあ——と言われても、何がよかったあなのかスイウには分からなかった。

「でもスイウ、可愛がられそうだよね——男の人に」

「ぶっ……な、何言ってるの！」

「だって、女の子みたいだし。みんなから、スイウ”ちゃん”って呼ばれないの？」

「なっ……」

そういえば、以前リンドウに言われたことが……

「な、ないよ！ そんなの！ あるわけないじゃん！-」

「へえ、あるんだあ？」

ニヤニヤと笑みを浮かべるキキは、テーブルに身を乗り出してからかってきた。

「スイウ”ちゃん”は、いかにもロリコン受けしそудしねえ」

「っ……うつ……キ、キキのばかあ！」

「あっ、ちよつとスイウ！」

半泣きになつて外に飛び出したスイウを、キキは追いかけてきた。しかし訓練を受けているスイウの足は速く、キキは離されてしまう。

「ちよつと、スイウ……待ってよ！」

さすがに言いすぎたか——キキがそう思っていると、スイウがこけた。何も無いところでつまづいて、「きゃんっ！」と女の子のような悲鳴を上げて転倒する。——可愛い。

「うう……」

「……ぷっ……くくっ……」

腹筋が崩壊しそうになるのを必死にこらえながら、キキはスイウを助け起こした。スイウは頬を膨らませてそっぽを向くと、「あれ？」と声を上げた。

「リツカ」

「……ん？ スイウ、どうしてここに？」

「リツカこそ、なんで内部居住区に」

「ちょっと知り合いのところだね。……隣の子は？」

リツカは少し首を傾げて訊ねてきた。スイウは、リツカとキキを互いに紹介する。

「こっちは、幼馴染の霧島キキ。リツカは、フェンリルの整備班に所属してる友達だよ」

「あ、スイウの同僚の方ですか。いつもスイウがお世話になってます」

キキがぺこりと頭を下げた。一方リツカは、キキの身体を隅々まで舐めまわすように見る。

「へえ……可愛いね」

リツカはニヤけながら、ちょっと複雑そうな表情をした。しかし、スイウにはよく分からないので頭の上に「？」を浮かべて首を傾げる。

「——じゃあまたね、キキ。お茶おいしかったよ」

「あつ、ちょっと……スイウ！」

「ん？」

リツカと一緒に帰ろうとして、キキに呼び止められた。リツカに「ちょっと待って」と言つて、スイウはキキの方を見る。

「あ、あのさ……ええ、と……」

「……何？」

「……や、やっぱり、何でもない！」

「？」

キキはなぜか顔を真っ赤にして、全速力で走り去ってしまった。その後ろ姿を見送つて、こちらにもよく分からない表情をしたリツカと並んで歩き始める。

「ねえ、スイウとキキちゃんってさ……別に、その……ただの幼馴染だよ……？」

「うん。そうだけど、どうかした？」

「いや……別に、何でもないよ。うん……」

「？」

リツカはそっぽを向いてしまい、しばらく口をつぐんでいた。

鼠捕り

鼠捕り

旧市街地・贖罪の街。荒れた地面の上に、オウガテイルが倒れて動かなくなった。オウガテイル一体とコクーンメイデン二体を討伐し終え、今回の任務は終了である。

コウタが歓声を上げ、スイウに駆け寄って肩を組んではしゃぎだした。

「よっしゃあ！！ このメンバーなら楽勝だね！」

「うるさい。こんな雑魚どもを倒したくらいで浮かれるな」

ソーマがフードをかぶり直し、めんどくさそうに呟いた。そんな彼らを見て、サクヤがクスクスと笑いながら近づいてくる。

「にぎやかなね。——そういえば、この四人での任務って、初めてだっけ？」

「割と上手に連携できてたと思いますっ！」

テンションが上がって変な踊りを始めたコウタから逃げ出して、スイウはサクヤに駆け寄った。にこりと笑って言う。

「ボク、上達しましたか？」

「ええ、もちろん」

「……そうか？」

笑い合う二人に、ソーマがうつむいたまま言う。

「スイウ、お前はもう少し間合いの取り方を覚えろ。お前の動体視力や反射神経が優れているのは知っているが、あれは流石に踏み込みすぎだ。いつか致命傷を食らう」

「え……」

動体視力？ 反射神経？ なんてそんなことをソーマが……

疑問に思っているスイウに、コウタが後ろから飛びかかった。

「さっさと帰ろうぜ。バガラリーが始まっちゃうよ」

バガラリーは、アラガミの大発生以前に作成された大長編娯楽映像作品だ。公共放送FBSで、最も人気の番組である。コウタも気に入っているらしかった。

「……なんでこいつらは、こんな呑気なんだ……」

バガラリーについて熱心に語るコウタと、それに笑顔で相槌を打つスイウを見て、ソーマが呟いた。それを聞きつけたサクヤが、ニヤニヤと笑う。

「ああいつの、うらやましい?」

「……………慣れ合いは嫌いだ」

「ふうん?」

……

「よお、無事に帰って来たな」

四人がアナグラに帰ると、今回一人だけ「デート」で別行動だったリンドウが待っていた。エントランス二階のソファに座って、サクヤからもらった配給のビールを飲んでいる。

「……………ご命令通り、いつも通りだ」

冷めた様子で報告するソーマの横で、コウタが大袈裟な身振り手振りで喋る。

「オレたち四人の華麗な連係プレー、リンドウさんにも見せてあげたかったよ! オレとサクヤさんの正確な援護射撃を利用して、スイウとソーマがコクーンメイデンを……………」

「お前、そんなに役立ってたか?」

「げ!?!」

あくまで冷静なソーマの突っ込みを受け、コウタがのけ反った。

一同に小さく笑いが起きる。

そんな様子を見てリンドウは、

「そうか。それならこっちも、デートの回数を増やしてもよさそうかな」

と呟いた。それを聞いたサクヤが、少し眉根を寄せて心配そうな顔をする。

「リンドウも、無茶はしないでね……？」

「ん？ ……まあ、生き延びてりやなんとかなるだろ。——はい、じゃあ解散！」

リンドウは飲み干したビールの缶を握りつぶして、エントランスを後にした。残された四人も自室に戻ろうとして、突然流れたアナウンスに立ち止まる。

『第七部隊が、ウロヴォロスのコアの剥離に成功。研究員は——』

「……ねえ、ウロヴォロスって、どんなアラガミ？ 強いのか？」

コウタがキョトンと首を傾げ、ソーマに訊いた。

「たまには自分で調べろ」

「えーっ？」

「サクヤさん。もしも、ボクたちが戦ったとして、勝てるアラガミ

ですか？」

「……そうね……」

スイウの質問に、コウタも黙ってサクヤの返事を待つ。

「……勝てないってこともないだろうけど……」

「確実に、一人二人は死人が出るだろ」

サクヤを遮って、ソーマがいつになく冷たい声で言った。

——死人が出る。

その言葉に、まだゴッドイーターになって日が浅いスイウとコウタだけでなく、サクヤや言った本人まで表情を強張らせた。

——死人が出る。

死と隣り合わせなのは分かっている——つもりだったが、改めて言われると恐怖に身体が震える。スイウは先日のエリックの件を思い出し、少し気分が悪くなった。そこから思い出される過去の記憶に、めまいがする。

「……じゃあ、ボクはこれで……」

「うん。……大丈夫？ 顔色悪いけど……」

「平気……よくあることだから」

心配するコウタに背を向けて、スイウは一人エレベーターに乗り込んだ。ふらつきながら自室に辿り着き、シャワーを浴びて着替え、ベッドに倒れこむ。

「——大丈夫、大丈夫……」

呼吸を整えながら、呟いてみる。

——生き残ればなんとかなるだろ。

「生き延びれば、なんとかなる……か」

リンドウのように前向きに生きることができたら、どんなに幸せだろう。スイウはリンドウの言葉を心の中で繰り返し、まどろみの中に落ちていった。

新入り

鼠捕りから一週間。この日の任務を無事に終えたスイウは、ソファに座ってクッキーを食べていた。

「——あ、スイウは知ってる？」

「ん？ 何を？」

「新しく配属される、神機使いのこと」

テーブルの反対側に座っているのは、台場カノン。第二部隊の防衛班に所属している、旧型神機使いだ。プラスお菓子作りが趣味だということ、甘い物好き同士意気投合し、時折こうして一緒にお菓子を食べている。

「スイウと同じで、『新型』なんだってさ」

「へえ……ちょっと楽しみだな」

「しかも、女の子だって」

「へえ……それはた——」

「楽しみ？」

ジロリと睨まれ、スイウはひるんだ。しかしすぐに笑顔を取りつくろい、無邪気に笑う。

「あはは、同じ『新型』の友達が増えるのは、素直にうれしいよ。
——でもまあ、コウタくんみたいな下心はないから」

「それは当たり前」

「……はい」

クッキーをちまちまとかじりながら、スイウはうつむいた。なんだが最近、女の子たちに冷たい態度を取られたり、そっぽを向かれたりすることが多い。何かしてしまったのだろうかと心配になっていた。

「……でもさ、どんな子だろうね。なんか、美人の予感」

「どうして？」

少し難しい表情で呟いたカノンに、スイウは訊ね返した。すると、コウタのような答えが返ってくる。

「アナグラって、なんか美人が多いし。ツバキさんは大人の魅力って感じだし、サクヤさんは頼れるお姉さんって感じだよ」

「カノンだって、可愛いと思うよ？」

「女の子よりも可愛い男の子に言われても、傷つく」

——また睨まれてしまった。

……

——と、カノンとの会話を思い出したスイウは、改めて目の前の女の子を見た。

「三島イロハです。よろしくお願いします」

名前を名乗って頭を下げ、アナグラ二人目の「新型」は簡潔に自己紹介を済ませた。その美貌に、コウタははしゃぐのを忘れて呆然と見つめている。その隣では、スイウも思わず見とれてしまっていた。

スラリとした身体に、はつきりとした目鼻だちの端正な顔立ち。つややかな長い髪は明るい茶色で、うなじで一つにまとめている。可愛いというよりも美しいという表現が相応しいように思えた。

「！」

スイウは、イロハと目が合った。悲しみに濡れた黒色の右目が、冷たく突き刺さるような視線を向けてくる。一瞬のことだったが、それでスイウは目をそらした。触れてはいけない、訊いてはいけない話題は、誰にだってあるだろう。

——……ボクだって、そうだから……。

イロハは、左目に眼帯をしていた。

「彼女はこれまで、各地の支部を転々としてきた。そのため実力は高い。所属は一応第一部隊になるが、最近装甲が頻繁に突破されていることへの対策として、防衛班に混じっての任務も同時にこなし

てもらったことになっている。——リンドウ、タツミ、頼んだぞ」

「はいはい」

「は、はい」

リンドウは極めてお気楽に、イロハに手を振りながら——第二部隊所属、防衛班班長の大森タツミは、ツバキの言葉に背筋を伸ばして返事した。ツバキはリンドウを一瞥し、何か言いかけたが止めた。代わりにタツミを見て、

「タツミ。よろしく頼む」

と言つて立ち去ってしまった。残された第一部隊と防衛班の面々は、これから何をどうすればいいのか分からず沈黙が続く。

最初に沈黙を破ったのはリンドウだった。

「——ま、何とかなるだろ。おい、タツミ、後は任せた」

「はい……って、リンドウさん？ どこ行くんですか！」

「ビール」

煙草を灰皿に押しつけて、リンドウはエントランスを出ていった。ポカンとする一同の中、「ちょっとリンドウ、私の部屋に勝手に入らないでよね！」とサクヤがリンドウの後を追う。それからソーマが黙って立ち去り、コウタもイロハに興味があるようだったが「バガラリー観なきゃ」と部屋に戻っていった。

次々とみんなが帰っていき、タツミはツバキのところに向かい、残ったのはスイウとカノン、それからイロハの三人だった。

「……みんな帰っちゃったけど……どうする？ スイウ」

「んー……」

しばらく悩んだスイウは、距離を置いて一人立ち尽くしているイロハに近づいていった。ひまわりのような笑顔を浮かべて、明るく誘ってみる。

「ねえ、一緒にお菓子食べながらお話ししない？」

「……………」

「カノンのクッキー、すっごく美味しいん——」

「邪魔です」

「……………」右目と同じ冷たい声に、スイウは笑顔を凍りつかせた。「…………え？」

「私に話しかけないでください」

他者を寄せ付けようとしない雰囲気、スイウもカノンも動けなかった。二人を置いて、イロハは立ち去ろうとする。

「まっ……待って！」

スイウは呼び止めて、エレベーターの手前でイロハの腕を掴み——

「っ!？」

——思い切り、突き飛ばされた。

乱暴に腕を振り払われて、胸をドンと押されて尻もちをつく。困惑を深めるスイウに、イロハは無表情に——しかし、これ以上ないくらい憎々しげな声で言った。

「私に関わらないで——」

——と。

「あなたの顔なんて、見たくありません——」

——と、そう言った。

歌音

「うー……」

スイウの部屋。ベッドにうつぶせてシーツを噛みしめて、スイウは今にも泣き出しそうな表情で唸っていた。イロハに突き放されて部屋に戻ってから、ずっとこの調子である。

「いきなり手を握ったりしたスイウも悪いけど、イロハちゃんの態度もどうかと思うよね」

「……ボクが握ったのは腕だもん……手じゃないもん……」

「……まあ、とりあえずお菓子でも食べて元気だしなよ。ほら、新作のマドレーヌ」

カノンが持ってきてくれたマドレーヌを口いっぱい頬張り、飲み込み、また頬張る。小さな口に次々と放りこんで、食べ続ける。スイウの食べっぷりは、まさしく——ただのヤケ食이었다。

「……ちよっと、一度に口に詰めすぎじゃない？ のどに詰まらせちゃうよ？」

「むぐむぐむぐ……むぐぐっ！？ んっ、んん〜！！」

「ほらあ、言ってる側から……まったく」

カノンはスイウに紅茶のカップを差し出し、それだけでは足りずカノンのカップも差し出した。もう口を付けてしまったものだが――

—仕方ないだろう。

「…………ふう…………助かったあ…………ありがとう、カノン」

「どういたしまして」

と、そこで部屋のドアがノックされた。

「はい？」

「スイウー、遊びに来たよー」

「あ、リツカ」

リツカはスイウの隣に座り、「はああ……………」と溜息をついた。

「どうしたの」

「いや、ちょっとさあ……………」

リツカはマドレーヌを口にくわえ、バインダーから書類を何枚か取り出した。それを、スイウに見せてくる。

「二人目の『新型』さんが来たの——二人とも、知ってるよね？」

「うん」

「でさ、その子の神機を点検してたら、かなり消耗が激しくて。今までちゃんと整備してたのかって、疑わしくなるくらい」

「へえ……そうなんだ」

頷くスイウに対して、カノンは少し首を傾げていた。コウタ同様、勉強はあまり得意ではない。

「それで、訊いてみたんだけど、一応整備は定期的にしてたんだって。ただどうも、無茶な戦い方してきたみたいでさ。装甲はタワーシールドなんだけど、かなり削れてて……実際に任務に出るまでには直しておかなきゃいけないから、慌ただしくて……」

「それはまあ、大変だね」

「そう！ もう大変で大変で、私過労死しちゃうそう！」

そう言ってリツカは、なぜかスイウに抱きついてきた。サラサラの髪に頬ずりしながら、幸せそうな顔をする。一方、抱きつかれているスイウは真っ赤になって慌てふためいていた。

「ちょ、ちょっとリツカ！ いきなり何するの、離してえ！」

「ダメ。——ああもう、本当に可愛いなあ。お持ち帰りしちゃいたい」

「お持ち帰り！？」

「……あー……癒されるー」

必死に逃れようとするが、リツカはなかなか解放してくれない。スイウはソファの向かい側に座るカノンに、潤んだ瞳を向けた。

「カノン……助けて……？」

「……勝手にしなさい」

「えっ？　ちよつと、カノン？　カノンさん！？」

カノンは頬を膨らませて、プンプンと怒りながら部屋を出ていつてしまった。――なぜ？

「カノン待つて――ぐえっ」

「逃がさないよー。スイウには、まだまだ愚痴を聞いてもらわないと」

「は、離してよお！」

それからみっちり数時間、スイウは頬ずりされ抱きつかれ、リッ
カにたつぷりと可愛がられた。

スノーボール

スノーボール

鎮魂の廃寺。

青白く照らされた雪の上を、スイウとリンドウが駆け抜けた。

「行け、スイウ！」

「はいっ」

リンドウがインパルスエッジで雷の弾を撃ち、背を向けて逃げようとしていたオウガテイルに命中した。スイウは段差の上から跳躍し、倒れてもがくオウガテイルに向かって空中からの突きを放った。そしてスイウの着地と同時に、二人で挟み撃ちにして仕留める。

「やった！ やりましたね、リンドウさん！」

「おお。だいぶ立ち回りが上手くなったじゃねえか、スイウ」

「えへへ」

頭を撫でられて、スイウは笑った。リツカに抱きつかれるのは恥ずかしいが、リンドウに撫でられるのは嬉しい。リンドウのことは、頼れるお兄ちゃんというふうに思っている。

「あ、スイウ、リンドウさん。そっちも倒したの？」

ささやかな至福のひと時を楽しんでいると、邪魔者——いや、コウタとサクヤがやって来た。

「ああ。まあ、俺たちにかかれば余裕だな」

「——で、イチャついてたんだ」

サクヤがジロリと二人を睨み、スイウはリンドウの後ろにさっと隠れた。リンドウはいつものように軽い感じで笑いながら、

「いやあ、可愛い子がいたら、はしゃぎたくなる——それが男ってもんだろ？　なあ、コウタ」

「もちろん！」

「ボクは女の子じゃないです！」

ふくれっ面になって抗議するスイウを頭を撫でて大人しくして、リンドウは「ところで」とサクヤに訊く。

「ところで、そっちは何も問題は無かったか？」

「ええ。ちゃんと一体討伐しました、上官殿」

「よし。これで三体倒したな……じゃあ、さっさと帰るか」

今回の任務の目標であるオウガテイル三体を討伐し終え、スイウ

たちはアナグラへ帰っていった。

……

贖罪の街。

ソーマは神機を構え、意識を周囲へ集中して歩いていた。段差の陰から出たところで、教会への入り口に目が引き寄せられた。

「誰だ……！」

素早くそちらを振り向いた。誰もいない——が、確かに誰かいた気がした。

「人影……か？」

眩き、教会に歩いていく。絶え間なく周囲を睨んで警戒しながら、このフィールドの中心である教会に入った。ステンドグラスに照らし出されたこの場所は、美しく、しかしどこか恐怖を感じさせる。

「！」

どこからか視線を感じ、目を上げた。——誰も、何も、いない。

「気のせいか……」

教会の中をしばらく見回って、ソーマは一度連絡を取ることにした。

「こちらソーマ。特務目標との接触はなし……搜索を続ける」

もう一度ぐるりと周囲を見回して、ソーマは教会を出た。

……

ソーマは知らなかった。

一つの影が、教会から立ち去るソーマを見つめていたことを……。

彩葉

オウガテイル三体の討伐の後。アナグラに戻って来たスイウは、エントランスでタツミを見つけた。ソファに座り込んで、ぐったりとしている。

「タツミさん、どうしたんですか？」

「ん……ああ、スイウ」

スイウは隣に座り、無邪気な笑顔を向ける。

「ボクでよかったら、相談に乗りますよ」

「あー……いや、ちょっとなあ……」

タツミは周囲をはばかりように視線を巡らせ、誰もいないことを確認して喋り始めた。

「ほら、二人目の『新型』……あいつと一緒に、任務に出ただけだよ……」

……

対アラガミ装甲壁が突破されたため、タツミ率いる防衛班は外部居住区を駆けまわっていた。侵入したアラガミはいずれも小型だったので、幾つかに別れて行動する。

「カノン、イロハ、こっちだ！」

カノンとイロハを連れたタツミは、住居の中に逃げ遅れた家族を見つけた。入り口付近には、オウガテイルが一体。今にも子供を庇う親に喰らいつこうとしていた。

「はあっ！」

ステップで一気に距離を詰め、タツミはショートブレードを横に振り抜いた。連続攻撃で動きを止め、離脱するのと同時にカノンのブラストによる銃撃が入る。モルターが炸裂し、爆発が消えると同時にタツミが再び斬りかかる。少しずつ民家から離れるように誘導しながら戦い、ほどなくしてオウガテイルは倒れた。

「よし。カノン、その人たちを安全なところに誘導してくれ」

「はい！」

カノンが逃げ遅れた家族を連れて移動を始めた。タツミは他の民家を確認しに走り出し、悲鳴に振り向いた。

「どうした！？」

振り向くと、カノンたちの前に新手のオウガテイルが二体待ちかまえていた。カノンが引き金を引き牽制しながら、後ろに庇った家族に言う。

「さ、下がってください！」

「ちっ……」

カノン一人で守りきるのには限界がある。タツミは舌打ちし、加勢するために駆け寄った。喰らいついてくるオウガテイルとの間に躍り出て、装甲で防ぐ。身体を後ろに流されながらも踏みとどまり、続いて襲いかかってきた二体目も同様に防いだ。

「っ……？」

このときになって、ようやくタツミは気づいた。

——イロハがない。

「イロハ！？ カノン、イロハはどこだ！」

「わ、分かりませんっ。——きゃあっ！」

振り回された尻尾がカノンを打ち据え、後方に吹き飛ばした。

「カノン！」

助けに駆け寄ろうとして、もう一体に狙われた。それをかろうじてガードして、反撃の突きを繰り出す。二体に挟まれ、タツミが焦りを感じ始めたところで、空から声が降ってきた。

「邪魔です」

その声に自然と身体が従い、考えるよりも先にその場を退いた。オウガテイルが二体同時に、寸前までタツミがいたところに喰らいつき——

——血飛沫を上げた。

「なっ……」

驚くタツミとカノンの前で、空から舞い降りたイロハはバスターブレード「虎剣」を振った。連続で横に薙ぎ払い、転倒し動きを止めた一体に、跳躍して空中からの斬撃を叩きこむ。オウガテイルは頭をひしゃげさせて動かなくなり、タツミはその吐き気を催す光景を見せないように家族の前に立った。

イロハは自己紹介と同じ冷たい声で、タツミとカノンに言う。

「邪魔です。——カノンさんは早く住民を避難させてください。——周りにアラガミが集まってきています。タツミさんは、他のアラガミが近づかないように牽制しててください」

「お、おう……」

指示を出している間も、イロハは神機を振り続けていた。尻尾をバネにした跳びかかりをかわし、背後の枯れ木の幹が削り取られる。イロハはそこに剣を叩きこみ、強引に叩き折った。折れた木がオウガテイルを下敷きにし、動きを止めて、捕食する。

「……………せ」

イロハは何か呟き、身動きの取れないオウガテイルにチャージクラッシュを叩きこんだ。枯れ木ごと両断し、また呟く。小さな声だったが、今度は聞こえた。

「私の左目を、返せ……！」

……

一通り語り終えたタツミは、スイウの方を見ずに言う。

「あいつ、眼帯してるだろ。任務の後にツバキさんに訊いたら、他人のことを詮索するなって叱られたけど……それでもしつこく食い下がってたら、教えてくれたよ」

「……何を、ですか？」

「あいつのこと」

知りたいか？——と、目で訊ねてきた。スイウはしばらく迷い、頷く。

「あいつはさ、ドイツ人の母親と日本人の父親のハーフなんだと。——で、オッド・アイだったらしい」

「……オッド・アイ……」

オッド・アイ——虹彩異色症。

「右目は黒色で、左目は青みがかった灰色。幼少時の写真に写ってたよ」

イロハは、他人と違うその左目を気に入っていて、大好きな母親

がくれた宝物と思っていたらしい。

「だが、ある日——まだあいつが神機使いになる前のことだが——アラガミに襲われたらしい」

「！」

アラガミに襲われた。

それはこの時代において、それほど珍しいことではない。ただスィウは、それを自分自身と重ね合わせてしまった。

「……なんか顔色悪いけど、大丈夫か？」

「……大丈夫です……何でもありません」

「？……で、両親は喰われてあいつは孤児になり、そのときに左目を失った——と」

それまで見えていた世界の半分を——自分が大切にしていた宝物を、奪われた……それは一体、どれほどの苦痛だろう？

「このことは内緒だぜ？……それからイロハにも、そんなこと関係なく、普通に接してやってくれ。なんかあいつ、ソーマみたいなんだよな」

「……分かりました。教えてくれて、ありがとうございます」

「まあ、お前は信頼できる奴だしな。期待してるぜ」

「はい」

もう一度丁寧に礼を言って、スイウはエントランスを後にした。

初霜

イロハはエントランスに向かうため、区画移動用エレベーターに乗り込んだ。眼帯のずれを直していると、背後で閉じかけたドアの隙間から誰かが滑りこんできた。

「——ん？ イロハちゃん」

「……………」

乗り込んできたのは、可愛い女の子——ではなく、聞いたところによると男だったか——スイウだった。イロハがアナグラに配属になった日に喋りかけてきた、同じ「新型」の神機使い。

「イロハちゃんも、エントランスに行くの？ …… あっ、もしかして、ツバキさんに呼ばれたとか？」

「……………」

イロハはこの少年に対して、徹底的に無視しようと決めていた。積極的に関わろうとしてくる人間ほど、邪魔な存在は無い。無視し続けて、相手が離れていくのを待つ。

明るく話しかけてくるスイウを無視し続け、ようやく開いた扉から早足でエントランスに出た。一階に下りて、先に待っていたツバキのもとに向かう。

「遅れてすみません」

「いや、構わない。時間ちょうどだ。——スイウも来たか」

「はいっ」

スイウと並んでツバキの前に立った。おそらく次の任務についてだろう。

「今日はこれから、お前たち二人で任務に出てもらう。鎮魂の廃寺で、ザイゴート四体の討伐だ。今回の目的には、『新型』同士での立ち回りや戦略を覚えてもらうことと、リンクバーストなどのデータを取ること含まれている。なるべく二人一緒に行動するように」

「……………はい」

「はいっ!」

——なるべく一緒に。

スイウを遠ざけたがっているイロハにとって、この指令はあまり喜ばしいものではない。——というよりも、嫌だ。

「ん? どうした、イロハ」

「いえ……………何でもありません」

「……………そうか。——では、頼んだぞ」

ツバキはその他にも幾つか指示を出し、エントランスを出ていった。残された二人は、しばらく沈黙が続いたが、スイウが無邪気に笑って言った。

「じゃあ、準備が済んだら、出撃ゲートの前で待ち合わせでいい？」

イロハは黙って首肯し、とことこと駆けていった。

……

鎮魂の廃寺。今夜はしんと雪が降っていた。

「イロハちゃん、下がって！」

スイウはイロハに距離を取らせて、宙に浮かんだ小型アラガミに銃口を向けた。

女体と卵殻が融合したような奇怪な形状に、巨大な瞳。空中を浮遊していて攻撃しづらいことと、索敵範囲が広く周囲のアラガミを呼びよせる習性があるため、複数を相手にするためには早めに仕留めることが重要である。

また、集団を形成することが多く——二人は実際に、三体に囲まれていた。最初の一体を倒す際、離れたところを巡回していた三体を呼び寄せられたのだ。

「——当たれっ！」

引き金を引き絞り、トモシビラピッドを連射した。ふわふわとした動きに照準を合わせながら、一体を集中的に狙う。撃ち落とすのと同時に剣形態に変え、先に斬りかかっているイロハと一緒に攻撃

する。

「よしっ……次！」

スイウが歓声を上げて振り返ったときには、イロハはすでに三休目に接近していた。細い身体で巨大な刃を振りかぶり、跳躍する。綺麗なフォームで、しかし、極めて機械的に「虎剣」を叩きつける。冷たい表情で肉を削り取り、着地と同時に落ちてきたザイゴートを横に薙ぎ払う。そこから連続攻撃に繋げ――

「――危ないっ！」

四休目が、イロハに向かって圧縮した空気の塊を吐き出した。

「くっ……」

威力がそれほど高い攻撃ではないが、被弾したイロハはよろめき連続攻撃が止まってしまふ。その隙に、動きを止めていた三休目が再び宙に浮かぶ。

「下がって」

スイウはイロハを一度後退させ、入れ替わりに三休目に向かって跳躍した。空中での三連撃から、再び落ちていくザイゴートに突きを繰り出す。それではまだ倒れなかったが、追撃は諦めて四休目の毒の霧をかわした。イロハが回復錠を飲んだのを確認して、スタングレネードを使う。

「そっち、お願い」

「……………」

イロハにはまだ体力が残っている四体目に攻撃してもらい、スイウは三体目を捕食して倒した。「エアショット」を手に入れ、イロハに向けて受け渡し弾を発射する。

「——んっ…………？」

「それ、使って！」

イロハは若干嫌そうな表情をしたが、文句を言うことなく銃形態に変えた。「火龍 改」の銃口を最後の一体に向け、強化されたエアショットを撃った。正確に打ち出されたパレットはザイゴートの大きな目に当たり、落ちたところにイロハが駆け寄った。スイウも攻撃しようとする、

「邪魔」

と呟き、睨みつけてきた。

立ち止まったスイウの前でチャージクラッシュが炸裂し、任務は無事に終わった。

……

翌朝。自室の扉がノックされた。

「……………はい……………」

「おはよー、イロハちゃん」

「……………何の用？」

朝から訪ねてきたのはスイウだった。不快感を露わにして訊くイロハに、スイウは笑顔で言う。

「あのね、さっきツバキさんから聞いたんだけど――」

「……………！」

「――これからしばらく、一緒に任務に出ることになったから。よろしくね！」

六花と彩葉（前書き）

あああああああ……明日で春休みが終わってしまいます……

六花と彩葉

イロハがアナグラに来て、二週間が経った。

……

「や、イロハちゃん」

スイウとの任務を終えたイロハは、自室に戻ろうとしたところをリツカに呼び止められた。

「なんですか、リツカさん」

「んー、まあ、特に用は無いんだけどね。見かけたから呼び止めて、ちよつと世間話でも……みたいな？」

「時間の無駄です。失礼します」

「あつ、ちよつとお」

廊下を早足で歩くイロハに、リツカはついてきた。

「ねえねえ、最近、ずっとスイウと二人で任務に出てるんでしょ？」

「……どこで聞いたんですか」

「ん？ そりゃあもちろんスイウだけ——貴重な『新型』二人の

ことだから、アナグラじゃ結構有名になってるよ?」

「……………そうですか」

「でね。ちょっと訊きたいんだけど……………二人とも、別に、そのう……………特別な関係とか、そういうのじゃないよね?」

早足で歩き続けながら、イロハは嘆息した。まだ珍しい「新型」だけに目立ってしまうのは仕方ないが、自分の知らないところで噂されているというのは気分が悪い。

「そんなのありえません。私がスイウに、そんな感情を抱くはずがないじゃないですか」

「……………本当に?」

「はい」

「本当に……………何もないよね……………?」

「何もありません」

イロハの部屋の前まで来た。リツカを振り返って、訊ね返してみる。

「リツカさんは、スイウのことどう思ってるんですか?」

「わわわっ、私!?」

途端に慌てふためくリツカを見て、イロハは「……………分かりました」

と呟いて自室に逃げ込んだ。

「ちよつ、イロハちゃん！ 分かったって、何が！？」

室外から聞こえてくる声を無視して、イロハは浴室に向かい、シャワーを浴びた。身体のところどころについた傷に、熱い湯が沁みる。——しかし、そこでふと気付いた。

「最近……怪我、減った……？」

口に出してみると、確かにそんな気がしてきた。以前より、怪我の度合いも回数も減っている。おそらく、アナグラに来てからか……

「……………！」

なぜかスイウのことが頭に浮かび、イロハは自分の脳みそを疑った。どうしてスイウが出てくるんだ！——と。

しかし同時に、少し納得もしてしまった。アナグラに来てから一番多く任務に同行しているのは、スイウだ。他人と関わらないために基本的に自室から出ないイロハにとって、一番長く一緒にいるのはスイウなのかもしれない。

「な………なんで、あいつが………」

ちよつと腹立たしげに思いながら浴室を出た。イロハは身体にタオルを巻き、眼帯をして、脱衣所を出る。冷蔵庫からジューズを取り出して、ベッドに腰掛け缶を開けた。

「……………はぁ……………」

「イロハー？」

「っ！……げほ、げほっ……」

突然ドアがノックされ、名前を呼ばれた。驚いて思わずジュースを拭きだしてしまい、急いでティッシュで拭きとる。

「スイウだけど……イロハ？ いるの？」

「ちょっと……待って……！」

さすがにタオルのままではまずい。タオルを払いのけ、慌ててクロゼットを開き適当な服を着る。下着は身につけていないが、仕方がない。

「ご、ごめん……何……？」

イロハはドアを開け、スイウを招き入れた。どこか慌てたようなイロハに小首を傾げながら、スイウは無邪気な笑顔で言う。

「ん？ 別に大した用じゃないけど……はい、これ」

「……？」

「カノンからクッキーのお裾分け。イロハも一緒に食べないかなあ……と思って」

「ちょ、ちょっと……」

スイウは自室から持ってきた紅茶を淹れ、皿に可愛らしいクッキーを盛りつけた。それらをテーブルに置いて、自分の分のカップを取り、ソファに腰かける。

「さっき少しだけ味見たんだけど、すごくおいしかったよ」

スイウがクッキーを一枚口に運び、嬉しそうに顔をほころばせるとても美味しそうに食べているのを見て、イロハも「じゃあ、少しだけ……」と一枚手に取る。

「……………」

「どう？ カノンのクッキー、おいしいでしょ？」

「……………うん」

一枚目を食べ終えたイロハは、頷き、二枚目に手を伸ばした。それを少しずつかじりながら、夢中でクッキーをほおばっているスイウに訊ねる。

「ねえ、スイウ」

「ん……………何？」

「……………やっぱり、何でもない」

「？」

——リツカさんのこと、どう思ってる？

その後も何度かチャレンジしようとしたが、結局、訊くことはできなかった。

蠅（前書き）

あー……今日で春休みは終わりです。宿題は終わらせましたが、なんか悲しいです。同じ中学だった人はいないので、早く知り合いを作りたいです。

蠍

大切なものを、すべて、喰い尽された。

……

「——スイウ？」

隣を歩くイロハに、スイウは意識を呼び戻された。

「何？ イロハ」

「何って……今日のスイウ、少し変な気がするんだけど」

「そんなことないよ」

「……なら、いいけど……」

夕方。二人は贖罪の街に来ていた。

今回の目的はアラガミの討伐ではない。イロハがフィールドの調査の任務を受けて、スイウは新しい神機を試すために同行を申し出たのだ。

「ソーマさんが、最近視線を感じないか——とか、怪しい人影を見なかったか——とか言ってたけど。……何か関係あるのかなあ」

任務の前、スイウはソーマに訊ねられた。よく分からないと答えたら、黙って立ち去って行ったが……

「……特に何もない……よね？」

「……帰る？」

イロハが立ち止まり、提案してきた。フィールドに異変があったわけではないし、ソーマの言っていた視線や人影もない。無駄に時間を潰す必要はないだろう。

もう一周フィールドを見て回って、帰ることにした。

蠍

大型アラガミを一体、視界に捉えた。

「スイウ！」

異変に気づいたイロハは、慌てて駆け寄った。

「スイウ！ どうしたの？ ねえっ……」

スイウは右手に神機を引きずり、左手で頭を押さえていた。普段からは想像できない凶暴な目つきは、どこにも焦点が合っていない。フラフラと視線をさまよわせて、繰り返し繰り返し呟いている。

「……赦さない……ぜん、ぶ……喰い……尽された……神なんて、

いない……こんな……間違ってる……！」

「！ 待つて、スイウ！」

引き留めようとしたイロハの手をすり抜けて、スイウはアラガミ——ボルグ・カムランに向かって駆けだした。まだこちらに気づいていないボルグ・カムランに、スイウは背後から肉迫する。

ボルグ・カムランは、グレートブリテン島南部が発生起源のアラガミだ。その姿を一言で表すのなら、「サソリの騎士」。特徴は巨大な尾針と、両腕の堅牢な盾。

「……………っ！」

スイウは鋭く突きを繰り出し、気づいたボルグ・カムランが振り返るまでに一連の攻撃を終えた。しかし連続攻撃の後も離れることなく、攻撃を続ける。周囲の地面を連続で突き刺す針を最低限の動きでかわし、反撃。

「くっ……………」

イロハは接近しようとして、とっさにタワーシールドを展開した。ボルグ・カムランの突進を防ぎ、それを追うスイウに呼びかける。

「スイウ！」

「……………」

スイウはイロハの方を見向きもせず、ひたすらボルグ・カムランを斬り続けている。「ナイフ 改」から強化した「獣剣 陽」が、

こちらに向き直ったボルグ・カムランの顔面部を突き刺す。

イロハはスイウの鬼気迫る様子を気にしながらも、ボルグ・カムランの反対側に回り込んで加勢する。「虎剣」を連続で横に振り回し、上に跳躍して叩きつけた。着地時に、ボルグ・カムランの攻撃の予備動作を見て取り、装甲を構える。だが――

「――スイウ!？」

スイウは気づいていないのか、攻撃を続けている。ボルグ・カムランがその場で回転し、その長い尻尾と針で周囲を薙ぎ払った。装甲を構える両腕から、衝撃が全身を駆け抜ける。一方、スイウはタイミングをはかってジャンプすることで尻尾を飛び越え、そのまま空中からの突きを見舞った。着地と同時に体勢を入れ替え、前方にステップして切り払う。

「……すごい」

おそらく初めて戦つたであろう相手を、スイウは圧倒していた。

「っ……」

しかし、ここにきてスイウの動きに乱れが出た。神機を振う手がブレて、ボルグ・カムランの盾に容易く弾かれてしまう。そこにボルグ・カムランが突進し、重たい盾に激突されたスイウは後方に大きく吹き飛ばされた。

「スイウッ――!？」

地面に突っ伏して動かないスイウに駆け寄って、イロハは異変に

気づいた。神機を握るスイウの右手から、鮮やかな血の色に染まっている。

「なんで、血が……」

「……………っ……………ない……………でもっ……………」

小さな声で呟き、力なく立ち上がるスイウの左手を、イロハは掴んだ。

「待って！ やっぱり何かおかしいよ、スイウ！ アナグラに戻る

——」

「邪魔」

以前のイロハと同じような拒絶の言葉を吐き捨て、スイウはイロハの手を振り払った。優しかった瞳は憎しみに濡れて、盾を振り上げて接近してくる敵しか映っていない。イロハは慌てて距離を取るが、スイウは無防備に接近し、神機を突き出す。重たい盾がスイウを叩きつぶそうとして——動きを止めた。

「！」

「獣剣 陽」によるホールド効果だ。動きを封じられているボルグ・カムランに向かって、スイウは神機を構える。そのとき、呟きが聞こえた。

「……………どんな、試練でも……………！」

右手からの出血が勢いを増した。鮮やかな赤を滴らせながら、ス

イウは捕食する。

いつもと違う——憎しみや怒りを露わにしたスイウに、イロハは恐怖を感じ、制止を呼びかけることができなかった。

「——おい！」

狂ったように剣を振り続けるスイウを前に呆然としているイロハを、一人の神機使いが追い抜いた。ホールドから解放されたボルグ・カムランの動きをスタングレネードで止めて、追撃しようとするスイウを思い切り蹴り飛ばす。

「リンドウさん！」

「イロハ、スイウから神機を離せ！」

言われて、イロハはスイウに駆け寄った。真っ赤に染まった右手から、神機を奪い取る。

「ここは俺に任せて、スイウをアナグラに連れて行け！」

「は、はいっ」

遠くに放りだした神機を拾おうとするスイウの手を引き、リンドウが足止めしている間にエリアを出る。ボルグ・カムランを睨みつけて暴れるスイウを強引に押さえつけ、イロハは贖罪の街を後にした。

傷（前書き）

祝・高校入学です。

傷

アナグラに戻ると、スイウは急いで治療を受けて、病室に運ばれた。出血の酷かった右腕は、手先から二の腕までが包帯に巻かれている。

「よお、イロハ」

配給のビールを手には病室に入ってきたリンドウは、ベッドの横に座ったイロハに歩み寄った。うつむいてスイウの寝顔を見つめていたイロハが、悲しそうな片目を向ける。

「……リンドウさん……」

「災難だったな。生きて帰って来てくれて何よりだ」

「……あの……ありがとうございました」

「はは、礼なんていいさ。部下を守るのは、上司の義務だ」

「……どうして……」

「あん？」

「どうしてリンドウさんは、助けに来てくれたんですか？ スイウの右手の怪我について、何か知ってたんですか？ なんでスイウは、あんな我を忘れ——」

「ストップ」

矢継ぎ早に質問するイロハに、リンドウは待ったをかけた。それからビールを一口飲んで、自分も近くの椅子を引き寄せて腰を下ろす。

「ふう……。まず、俺が助けに行った理由から話すか。——お前らが贖罪の街に行った後、ボルグ・カムランが近くに出没したっていう情報が入ってな。もともと調査目的の任務だったし、道具もそんなに用意してなかっただろ？ 不意を突かれて攻撃されても危ねえし、俺がビールを後回しにして助けに行つてあげたってわけだ」

「……………それだけですか？」

「？」

「本当に、それだけですか？」

イロハは、別の事情があつたのではないかと訊ねた。

「ボルグ・カムランを発見してから、スイウの様子はおかしかった……………」

「へえ……………おかしいって、どんな風に？」

余裕綽々、興味津津、人を食つたような態度でニヤリと笑うリンドウに、イロハは少し腹が立った。

「……………あの子のスイウは、私に似ていました」

仇を睨みつける、憎しみに濡れた瞳——。

「スイウに何があつたんですか？ リンドウさんは、何か知ってるんじゃないですか？ スイウがボルグ・カムランと出会うつと不味いと知っていたから……だから、助けに来たんじゃないですか？」

イロハは声を荒げそうになるのを必死に自制し、静かに、リンドウに訊ねた。

「スイウに昔、何があつたんですか？」

「……………」

リンドウはイロハの視線を見つめ返し、黙り込んだ。真面目な表情でしばらく考え込み、言う。

「知りたいのか？」

「はい」

「……そうか」

リンドウは飲み干した缶をゴミ箱に放り、椅子から立って、見事に外れたそれを拾い上げた。

「まあ、スイウは……お前の場合と似たようなもんな」

スイウも昔、アラガミに家族を喰われたという。

「ただ、あいつの場合、ちょっと状況が特殊で……フェンリルから、神機使いが派遣されなかったんだ」

「それは……住民を見殺しにした……ということですか？」

「ああ……まあ、そうなるな」

「どうして……？」

「だから、特殊だったんだよ」

リンドウは再び椅子に座った。

「——ま、かなり悲惨な出来事だな。奇跡的に生き残ったあいつは、心に傷を負ってしまった——と。それで今までは、あいつがボルグ・カムランに出くわさないように——その過去を思い出さないように、任務を与えてたんだが……運が悪かったなあ……」

リンドウは煙草を口にくわえ、しかし病室であることを思い出したのか、火は点けなかった。

「……それから、右腕の怪我のことだが。前にもサクヤと任務に出たとき、同じことが起きてな。その後に、サカキのおっさんに内緒で教えてもらったのさ」

「内緒だぜ？」と念を押して、リンドウはスイウの適合率が不安定なことを教えた。

「——と、いうわけで。一通りの説明はしたし、俺は帰るわ。……イロハ、お前はどうすんだ？」

「私は……ここにいます」

「……そうか。まあ、なんだ……がんばれ」

リンドウは最後にスイウを見て笑いかけ、病室を出ていった。その去り際、思い出したように振り返り、イロハに教える。

「世の中、知らないでいいこと——いや、知らない方がいいことなんていくらかもある。……が、知りたかったら、触れてみな」

「……………?」

よく分からない言葉を残して、今度こそリンドウは病室を出ていった。

約束

……

リンドウが病室を出ていった後。

イロハは椅子を部屋の隅まで持っていき、部屋の照明を消した。壁にもたれて瞼を閉じる。スイウにつきっきりでいたため、完全に睡眠不足だ。全身が疲れを訴えていて、すぐに深い眠りへと沈みこんでいった。

……

スイウの家族は、一体のアラガミに喰われた。

蠍。

蠍のような外観の、アラガミ。

しかしやつは、ボルグ・カムランではない。ボルグ・カムランだったなら、通常通り、すぐに神機使いが救助に駆けつけたはずだ。

やつ——スサノオは、第一種接触禁忌アラガミだ。

スサノオとの戦闘は、当時も今も解禁されていない。そのため神機使いの派遣が大幅に遅れ、また、命令を無視してやって来た神機使いのほとんどは、このゴッドイーター・キラーに敗れ——捕食された。

地獄としか言いようのないその場所で、スイウは奇跡的に生き残った一人となった。しかし、心に受けた傷は深く、精神的に不安定な日々が続いた。今は腕輪でほぼ隠れているが、何度もリストカットを試みた痕がいくつも刻み込まれていた。

「——うつ……あ……」

包帯に巻かれた右腕が痛み、スイウは目を覚ました。ゆっくりと目を開けて、しばらくぼんやりと闇を眺め、病室にいることを知る。

——怖い。

静まり返った病室内は、耳が痛いほどの静寂に満たされていた。見渡す闇の中にあの日の光景が思い浮かび、頭の奥に悲鳴が木霊し、吐き気を催す真紅の匂いが鼻腔を突き刺す。このままでは周りの闇に飲み込まれてしまいそうで、恐怖に身体を縮める。

「やつ、やだ……いや……やだよお……」

——……ウ……

——助けて……

——私たち、

——…スイウ……ねえ……

——たった一人の家族じゃない。

「……やめて……やめてよっ、お姉ちゃん……！」

——助けてっ………！

あの日聞いた悲鳴と、スイウ自身の声にならない叫びが重なった。だが、ここにはリンドウもコウタもない。サクヤも、キキも……。

「っ………」

誰でもいいから、会いたかった。衝動的に身体を起こそうとすると、全身に鈍い痛みが走る。それでも無理に上体を起こして、痛みを押し込んでベッドから転がり落ちてしまった。

「っあ………あ………」

激しい痛みに襲われて、立ち上がる気力がなくなってしまった。このまま、もう一度眠ってしまいたい。そして、二度と朝が来なければいい………！

「——スイウ………？」

「！」

「ど、どうしたの、スイウ！ 大丈夫！？」

驚いたまま、スイウはイロハに抱き起こされた。暗闇に慣れてきた目に、片目で心配そう見つめてくるイロハが映る。

「……イロハ……」

「立てる？ ベッドに戻らないと……」

イロハはスイウを抱きかかえて、ベッドに運んだ。毛布をかぶせて、ベッドの隅に腰掛ける。

「……なんで、ここにいるの……？」

「なんでって……スイウが怪我したのは、私が止めてあげられなかったせいでもあるし……いろいろ、心配だったし」

似てるから——と、イロハは言った。

「ごめん……リンドウさんから聞いた。スイウの家族も……アラガミに殺されたって」

「……うん……」

スイウが目を伏せると、イロハの冷たい指先が頬に触れた。ビクリと身体を震わせて目を見開くスイウに、イロハが最初に会ったときとは違う、優しい声で言う。

「私、あんな性格だし、上手く言えないけど……でも、スイウ——」
イロハは体勢を変え、覆いかぶさるようにして身体を寄せた。

「——私は、ずっと側にいるから」

少しうるんだ片目と視線が絡み合い、スイウは頬が熱くなるのを感じた。先ほどまで感じていた恐怖よりも、うまく言い表せない感情が強くなる。イロハも、暗い中でも分かるほど頬を紅潮させていた。

「私が、スイウを助けるから。——だからスイウも、私を助けて……ね？」

過去に傷ついた者同士、

互いを庇い合い、

醜い傷を舐め合うことしかできなくても。

「一緒に戦おう？」

「……………うん」

スイウは左手を伸ばし、ぎこちなくイロハの背中に回した。

「ありがとう」

イロハは嬉しそうに微笑み、傷ついて動かないスイウの左腕の分も、しっかりと抱きしめた。

……

——約束だよ。

アリサ

……

スイウの右腕が治ってから数日後。リハビリも兼ねた簡単な任務を終えたスイウとコウタは、新人区画エレベーター前のソファに座っていた。

「——いやあ。やっぱり俺らコンビって、最強じゃね？」

「んー……確かにそこそこ強いとは思っけど……簡単な任務だったしね。油断しちゃダメだよ」

真面目に語るスイウに、コウタは少し苦笑した。それからふと思いついたように、訊ねてみる。

「そっいえばさ。スイウとイロハは、一体どういう関係なわけ？」

「！ どっ、どっというって……」

「だって最近、いつも一緒にいるじゃん。イロハもさ、アナグラに来た時より丸くなったっていうか……お前以外には若干冷たかったりするけど、だいたい周りに打ち解けてきた感じだし。これはひょっとして、二人に何かあったのでは——って、リツカさんが言ってた」

「リツカが？」

「うん。……なんか、ちょっと怖かったぜー……」

「んん……？」

リツカを怒らせるようなことした覚えがなく、スイウは真剣に首を傾げていた。それを見て呆れたように溜息をつき、コウタはスイウに詰め寄った。首に腕を回して逃げられないようにして、改めて訊く。

「で？ あのイロハを一体どうやって落したんだあ？ 二人はどこまで進んだんだあ？」

「どこまでって……ボクとイロハは……別に、ただの仲間でしょ？」

「ふうん……へーえ……」

「……何、その目」

「いやいやいやいや、何でもないよ。——っお、イロハ！ 丁度いいところに来たな」

「何？」

自室からイロハが出てきた。シャワーを浴びていたらしく、服を着替えて、いつもは縛っている髪を解いている。

「今さ、スイウとお前の関係について話してたところなんだよ」

「ちょ、ちょっと、コウタくんっ！」

「……私とスイウの関係？」

慌てるスイウの隣に座って、イロハは涼しげな表情で首を傾げる。ちらとスイウを見て、コウタに向き直る。

「ただの仲間だけど」

イロハは完璧なポーカークフェイスで言った。しかしコウタは、スイウのを見たときに一瞬浮かべた表情を、見逃しはしなかった。

しかし、

「なあんだ。ただの仲間なのかぁ……ちえ、つまんねえの」

ニヤリと笑って、コウタは嘆息した。二人のためにも、あえて、黙っておく。それがコウタ流の心遣いだ。

「——あ、そうだ。私、二人を呼んでくるようにって、ツバキさんに言われてたんだけど」

「ツバキさんが？」

「新しく派遣された神機使いの紹介をするから、エントランスに来てって」

「……また新人？」

「うん。しかも、アナグラ三人目の『新型』。支部長が、わざわざロシア支部から連れて来たらしいけど……ここにきて新型ラッシュ

っていうのは、何か裏がありそうで……」

最後の方は、ほとんどイロハの独り言だった。

……

「アリサ・イリーニチナ・アミエーラ」

ロシア支部からやって来た、アナグラ三人目の「新型」は、いつものイロハのように冷たい口調で名乗った。ただ違うところは、イロハのように他人を拒絶するような——というわけではなく、他人を見下すような感じ。

「彼女は実戦経験こそ少ないが、演習では常に高い成績を残している。追い抜かれないように努力するんだな」

エントランスに集まった第一部隊の面々を見回して、ツバキは抑揚のない声で言った。その隣で、アリサは銀髪を手で弄びながら、
「よろしく願います」とだけ挨拶する。

「——なあなあ、この子、可愛くない？」

「……………え？」

コウタは隣に立つスイウにこっそり告げると、一歩踏み出した。スイウが止める間もなく、満面の笑みでアリサに告げる。

「可愛い子なら、いつでも大歓迎だよっ！」

「？——」

アリサは小首を傾げ、それから冷たい視線でコウタを見据えた。

「——そんな甘い考えで、よくこれまで生き延びてこられましたね」

「……へ……？」

口をポカンと開け固まってしまったコウタを無視して、ツバキはリンドウを見る。

「アリサはしばらく、リンドウについて行動するように。——リンドウ、頼んだぞ」

「はいはい」

相変わらず軽い感じで、リンドウは了解した。

……

解散後。区画移動用エレベーターの中には、リンドウとツバキの二人だけだった。

「——貴重な『^{レア}新型」が三人も揃ってるのって、極東支部^{ごくとう}くらいのもんじゃないすか？　しかも今度のは、支部長自らロシアから連れてくるなんて——ね」

「そうだな」

「何か、知ってません？ 上官殿？」

「……………」

タバコを口にくわえながら、リンドウは訊ねた。いつも通りの少しおどけた感じで——しかし、目だけは笑っておらず、横目で姉の表情をうかがう。ツバキはしばらくの沈黙の後に、逆に訊ね返した。

「……リンドウ……お前、何をしようとしている……？」

「何って？」

「何か、厄介なことだ」

——「特務」……とか。

「ははっ、厄介なこと……ねえ。別に、何でもないさ。心配しすぎだよ、姉さん」

ベテラン区画に出て、リンドウは自室に戻っていった。

講義？（前書き）

あああああ……憂鬱です。

明日から、二泊三日で高校の勉強合宿なるものに行ってきます……
はあ。

講義？

スイウとコウタ、アリサの三人は、講義のためにサカキ博士の研究室に来ていた。サカキ博士はモニタを指して言う。

「アラガミを構成しているオラクル細胞は何でも食べる。動物や植物のような生物に限らず、鉱物やプラスチックのような合成樹脂…… 挙句には、通常の生物には危険な核廃棄物だって食べてしまう。建造物や大地だって…… ほら、この通りだ」

モニタに、アラガミに喰い荒された建造物——おそらく贖罪の街の付近だろう——が映し出された。

「結果、『食べ残し』である従来の環境は、減少の一途をたどっている。この辺りには、春には桜を、秋には紅葉を見に行くなんて習慣もあつただけど…… 今となつては、望むべくもないね」

モニタが切り替わり、桜と紅葉の写真が現れた。スイウがそれに想いを馳せていると、コウタは居眠りを始めてしまった。一同の呆れたような視線が集まるが、当然本人は気づかない。

「その一方で、アラガミは食べたものの性質を取り込むことがある。最近では『光合成』を行うアラガミすら発見されているんだよ」

サカキ博士は室内をゆつくりと歩きまわり、解説を続ける。

「窒素79%、酸素21%…… 世界中の植物が二十年前の三割弱まで減ってしまった今でも、地球の気候は保たれている。これがアラガミの『光合成』のおかげだとは、実に皮肉な話だと思わないかね

「？」

「……うーん……かあちゃん、もう食べれないよ……」

「……………」

コウタがベタな寝言を呟いた。一瞬訪れた沈黙を破って、アリサが大きな溜息をつく。

「……ホント、自覚が足りない人ですね」

「ふむ……まあ、コウタくんは放っておいて、話を進めようか」

サカキ博士はモニタを消し、スイウとアリサを見た。

「キミたち、『ノヴァの終末捕食』って言葉、聞いたことあるかい？」

その質問には、二人とも頷いた。銀髪を指先ですきながら、アリサが答える。

「アラガミ同士が喰い合いを続けた先に、地球全体を飲み込むほどに成長した存在、『ノヴァ』が引き起こすとされる……『人類の終末』」

「……………」

アリサの言葉に、コウタがわずかに瞼を開けた。その言葉を頭の中で反芻し、だんだん目が覚めてくる。

「……でもそれは、誰が言い始めたのかも知れない単なる風説に過ぎないって、言われてます……よね？」

スイウは上目遣いに、サカキ博士に訊ねた。

「そうだね。……まあ、あくまで一つの可能性にすぎない。そこまですく考える必要はないだろうね」

「……『エイジス計画』が完成すれば、それから守れるんだろ……？」

コウタがどこか焦ったような、怯えたような様子で言った。しかしサカキ博士は、

「犬という動物を知っているかな？」

「へ？」

「もう大分数は少なくなってしまったが、今もまれに外部居住区などで見かけることがあるはずだ。犬は賢く……言葉こそ話せないが、我々人間とコミュニケーションをとることができる」

「あつ、ボク知ってます！ すっごく可愛いですよね！」

目を輝かせて嬉しそうに言うスイウに、サカキ博士は微笑んだ。それから、ポツリと呟く。

「犬のような性質を引き継いだアラガミがいれば、あるいは共生で生きるのかもしれないね」

「……共生？」

スイウとアリサの声が重なった。スイウはそれまでとは打って変わって黙り込み、アリサは憎々しげに吐き捨てる。

「……アラガミと仲良くなんて、出来るわけないじゃない……」

そんな二人の様子を見て、サカキ博士は講義を終えることにした。

「今日の講義は、これまでにしよう。みんな、お疲れ様」

少し沈んだ雰囲気のまま、それぞれ自室へ帰っていった。

空（前書き）

いま、合宿先で書いています。わくわきしますねえ〜

空

リンドウは、遅れてやって来た。

「あつ、リンドウさん。遅いですよ」

「悪い悪い。ちょっと、デートの約束をしててな」

スイウは遅刻に文句を述べたが、リンドウに頭を撫でられると「……えへへ」と微笑んで引き下がった。そんなスイウを、イロハは少し不満そうに睨む。

「おつ……今日は『新型』三人とお仕事だな。足を引っ張らないように気をつけるんで、よろしく頼むわ」

「旧型は、旧型なりの仕事をしていただければいいと思います」

「はっは。ま、せいぜい期待に沿えるように頑張ってみるさ」

アリサの態度を気にすることなく、リンドウはいつも通り笑った。それからアリサに歩み寄って、肩に手を置き――

「きゃあー!」

悲鳴を上げて飛び退いた。これには少し驚いた様子で、リンドウが呟く。

「あーあ……ずいぶんと嫌われたもんだなー」

「あ……す……すみません！ なんでもありません、大丈夫です」

「フツ……冗談だ。んー……そうだなあ……よし、アリサ」

リンドウは視線を上に向け、空を見上げた。

「混乱しちゃったときはな、空を見るんだ。そんで動物に似た雲を見つけてみる、落ち着くぞ。それまでここを動くな」

「な、なんで、私がそんなこと……」

「これは命令だ。そのあとで、イロハと一緒にこっちに合流してくれ。いいな？」

「私もですか!？」

「これは命令だ。——行くぞ、スイウ」

イロハとアリサを置いて、スイウとリンドウはフィールドに降り立った。

……

「あいつのことなんだがな……」

並んで歩きながら、リンドウが言いにくそうに話し始める。

「お前と同じで、どうもいろいろとワケアリらしい」

「ワケアリ……ですか」

「ああ。……まあこんなご時世、皆いろんな悲劇を背負ってるっちゃあ、背負ってるんだが……。同じ『新型』のよしみだ。あの子の力になってやれ、いいな？」

「はいっ！」

……

一方、イロハとアリサ。

イロハは壁にもたれて座って、動物に似た雲を探しているアリサを見ていた。嫌がってはいたが、命令通り、真剣に探している。他人を見下すような言動を取るが、基本的にまじめな性格なのだろう、と思う。

「——どう？ 見つかった？」

「まだです。……この受け答えは、もう何度もしましたけど……そんなに早く、スイウさんのところに行きたいんですか？」

「なっ……」

淡々と指摘するアリサに、イロハは慌てて起き上がった。少し声を裏返らせながら、必死に弁明する。

「なんで私が、スイウのところ……ただ、そのつ……早く任務を終わらせて帰りたいからっ……」

「見苦しいです」

「……………はい」

イロハは真っ赤になってうつむいた。取り乱しように興味を持ったアリサは、空を見渡すまま、落ち着いた声で言う。

「アナグラで、噂になってますよ。私は最近来たばかりだからよく知りませんけど……『あのイロハが誰かに心を開くなんて、思わなかった』……って。確かに、分かりやすいですね」

「……………そんなに？」

「はい。私が見ていても分かります。スイウさんと一緒にいるときのイロハさん、すごく幸せそうですから」

「……………そっか」

それきり互いに黙ってしまった。あまりにも静かで穏やかなので、すぐそこが戦いの場であることを忘れてしまいそうだった。

「——そろそろ、行きましょう」

「見つかったの？」

「そんな、都合よくあるわけじゃないじゃないですか」

冷めた様子で、アリサはフィールドに飛び下りた。

グリーンサラブレッド（前書き）

今晚も、合宿先からの投稿です。

グリーンサラブレッド

グリーンサラブレッド

今回の任務は、シユウ二体の掃討。フィールドは贖罪の街だ。

シユウの発生源はユーラシア大陸中央部。硬い翼手を持つ人型のアラガミだ。その翼手を利用した肉弾戦を得意とする一方で、掌にオラクルを集めて放出するという遠距離攻撃も行う。また、滞空時間は長くはないが、翼手を広げて滑空攻撃を仕掛けてくることもある。

「——今回の任務は、俺とイロハが前衛。スイウとアリサは銃形態での援護を主に、隙を見て捕食・近接攻撃。……いいな？」

「あのっ……どうして、ボクじゃなくてイロハが前衛なんですか」

「お前はときどき、アブなくなるらしいからな。今回は、後方支援だ」

「……はい」

「私なら大丈夫だよ。それに万が一のときは、スイウが守ってくれるんでしょっ？」

心配そうに表情を曇らせるスイウに、イロハが明るく笑いかけた。

最初会ったところには見せなかった笑顔だ。それを見て、スイウも自然と笑みがこぼれる。

「――戦場^{フィールド}でいちやつくのは、どうかと思います」

「賛成だ」

「！」

アリサとリンドウの批難を受けて、二人は慌てて距離を取った。
――と、スイウがふいに立ち止まる。

「どうしたの？」

「……………いる」

スイウは目を閉じて、耳を澄ます。わずかな気配を感じ取り、教会を指さす。

「リンドウさん、この中に一体います」

「ほーお……驚いたな。ソーマみたいだ」

「？」

「いや、何でもない。行くぞ」

リンドウを先頭に、イロハ、アリサ、スイウの順に進んでいく。それぞれの神機を構えて油断なく歩を進め、中を覗き込んだリンドウが小さな声で告げる。

「……いたぞ」

一度立ち止まり、全員でタイミングを計って飛び出した。それぞれ散開し、スイウが引き金を引く。ノーマルのパレットがシユウの頭部に着弾し、爆発した。リツカに頼んで改良してもらったおいたパレットである。

「——らあっ！」

リンドウが「ブラッドサージ」を振り抜き、シユウの翼手を削った。しかし、傷は浅い。背後に回り込んだイロハが、反対側から翼手を斬る。わずかに狙いがずれ、これは拳に当たった。

二人がシユウの側から離れるのと同時に、スイウとアリサは同時に狙撃した。ラピッドを連射し、細かな弾の雨がシユウに降り注ぐ。連射しながら移動し、シユウの動きを見ながら位置取りを変える。地面を転がって左右に別れると、その間を翼手がすり抜けていった。すぐ耳元で風を切る音が聞こえ、身体を強張らせる。

今回の標的は二体。合流されると、同時に相手することになってしまい危険だ。あらかじめ分断して戦うか、合流される前に一体を倒す必要がある。

「スイウ、アリサ！」

シユウに駆け寄りながら、リンドウが二人を呼んだ。拳を振りかぶるシユウの眼前でスタングレネードを炸裂させ、動きを止める。四人で取り囲み、一斉に捕食した。バースト状態のまま、前後の位置取りを入れ替えながら攻撃する。

「離れる！」

リンドウの声に散開する。スイウが再び銃形態で構えるときには、シユウはすでに身体の自由を取り戻していた。出方を窺いながら、リンドウとイロハは数回斬りつけては離脱を繰り返している。

「ちっ……」

人のものよりも遙かに大きな拳を、リンドウは装甲で防いだ。後ろに流されたその背中を跳び越えて、イロハが空中から「虎剣」を叩きつける。頭部に一撃を喰らったシユウは、頭に翼手をやってよろめいた。着地と同時に、イロハは神機を横に振りかぶる。

「——イロハ！」

「っ……！？」

追撃に移ろうとしたイロハが、死角から飛んできたオラクルによる小爆発で吹き飛ばされた。戦いに気づいてやって来たのか、二体目が教会の中心に降り立つ。挑発するかのように手招きしていた。

「！」

起き上がろうとしたイロハに、一体目が低空を滑空しながら襲いかかる。イロハは装甲を開こうとするが、タワーシールドは展開が遅い。痛みを覚悟し――

「アリサ！？」

神機を剣形態に変えたアリサが、バックラーを構えてイロハの前に立った。シユウの攻撃を防ぎ、驚くイロハを見下ろして言う。

「足を引つ張らないでください」

「……ごめん」

謝り、立ち上がったイロハの横を、風が一つ吹き抜けた。

「獣剣 陽」を構えたスイウが、滑空を終えたシユウに接近し斬りつけた。反撃される前に連撃を叩きこむ。アドバンスドステップでパンチを紙一重でかわし、側面から翼手を切り刻む。金属光沢のある翼が削れ、舞い散った銀粉がステンドグラスの光に煌めく。

リンドウが相手をしていたシユウが、掌からオラクルを放った。スイウは背後を確認することなくそれを回避する。まるで背中にも目があるかのような立ち回りで、死角を全く感じさせない。シユウを易々と翻弄しながら、煌めく銀粉の中で舞い踊る。

「……オオツ……！」

ホールドが発動し、シユウの動きが封じられた。スイウが攻撃を続けている反対側に回り込み、イロハはシユウの頭部にチャージクラッシュを見舞った。シユウはホールドから解放されると同時に弱々しく咆哮し、倒れ伏して動かなくなった。

「……スイウ……っ？」

イロハはすぐに異変に気づいた。すでに倒したシユウの屍骸を、スイウは休むことなく斬り続けている。

——また……！

「スイウ！ もう終わったじゃない……ねえっ……」

「どうした！？」

「リンドウさん、スイウが……」

「ちっ、またか……！」

スイウは、リンドウが言っていた「アブない」状態になっていた。

……

今回の任務は、結果としては成功に終わった。

特別（前書き）

ただいま帰りましたあ、イチゴダイフクです！

まともに勉強したことがなかったので、大変でした……。先生の
見回りを？い潜りながらの執筆は、スリリングでしたね！

えゝ……。まあ、苦労話はほどほどに。とりあえず、どうぞゝ

特別

……

シウウ二体の掃討任務は、成功だった。

途中で戦線を離脱することになったが、スイウの精神状態も、任務が終了するころには正常に戻っていた。

……

翌日。サカキ博士の研究室に、スイウ、イロハ、コウタ、アリサの四人は集まっていた。もちろん、博士の講義を受けるためなのだが、コウタは例によって居眠りしている。

「アラガミ——オラクル細胞は発見されたとき、まだアメーバ状のものだった。それからミミズ状のアラガミが発見され、半年後には獣型のアラガミが発見された。そして一年経つころには、一つの大陸がアラガミによって滅ばされたんだ」

コウタの頭を指先でつつきながら、サカキ博士は熱心に語る。

「彼らが食べたものの形質を取り込み、進化するとしても、異常なスピードだと思わないかね？ ……そう、正確には彼らは進化など

していないんだ。事実、オラクル細胞の遺伝子配列は変化していない。一つとしてね」

「そんなことはありませんよ！ 現に奴らは、形態変化してるじゃないですか」

サカキ博士の言葉に、アリサが反論した。しかし、サカキ博士は笑みを浮かべたまま、悪戯っぽく言う。

「彼ら……アラガミもね、今のキミと同じなんだよ」

「わ……私と、同じ……？」

「そう。食べたものの形質を取り込むというのは、知識を得る、ということ」

ただ知識を得て賢くなっているだけなんだ——と、サカキ博士は言った。

「どういう骨格をしていれば、速く動くことができるのか。空を飛ぶためにはどうすればいいのか。それこそ、スポンジが水を吸い込むように情報を取り込んで、わずか二十年の間に、彼らは非常に高度な形態を得るまでに至ったんだ」

熱弁をふるい、一つ嘆息すると、サカキ博士はコウタの頭を指先で弾いた。

「ふむ……アラガミがコウタくんくらい勉強嫌いだったら、良かったんだがね」

「同感です」

「——あ。そういえば、彼らの勉強熱心さには舌を巻かされるばかりだね。なんと、ミサイルを発射するアラガミが目撃された噂まである。これが確かなら、彼らは人間の作った道具さえも取り込んだということだよ。実に興味深いと思わない？　それほどまでに複雑な情報を取り込めるのなら——」

「——まるで人間というアラガミが現れるのも、遠い日じゃないのかもしれない」

これまで黙っていたスイウが、サカキ博士を遮って呟いた。

「……………スイウ？」

隣に座るイロハが、心配そうに横顔を見た。スイウはその視線に気づくと、

「あ……………何でもないよ。うん……………」

と作り笑いを浮かべてうつむいた。

……

講義終了後。研究室には、サカキ博士と、イロハが残っていた。

「それで？」

サカキ博士はコーヒーのカップをテーブルに置き、向かい合って座っているイロハに訊ねる。

「質問したいことがあるって言うてたけど、何かな？」

イロハは片目で睨むようにして、サカキ博士を見た。全てを見透かしているような視線を見返して、呼吸を整え、訊く。

「スイウのことです」

「好みの女性のタイプとか？ スイウくんのことなら、本人に訊いた方がいいんじゃないかな？」

「そうじゃありません。スイウの、その……精神状態のことです」

イロハの言葉に、サカキ博士は「ほう……」と感心したように頷いた。

「やっぱり、隠し通すことはできなかったか……愛の力かな？」

「ふざけないでください」

「ふふっ……ゴメンゴメン。——でも、そうだな。話してもいいけど、誰にも言っちゃ駄目だよ？」

「言いません」

「彼の知られたくない過去を知って、今まで通り、彼に接することが出来るかい？」

「……………できます」

「なら、話してあげよう」

博士はコーヒを一口飲み、ゆっくりとカップを置いて、話し始めた。

「ソーマくん……知っているね？」

「はい」

「彼もまた、常人離れているというか——まあ、少し事情があるんだが——世の中には、我々一般人とは違う『特別』な人間がいるみたいだね」

「『特別』……？」

「そう、『特別』だ」

眼鏡を指で押し上げながら、サカキ博士は言う。

「『神に選ばれし者』と言ってもいいかもしれない。——おっ、なんだかつこいいね！」

「真面目に話してください」

「僕は真面目だよ？ スイウくんは間違いなく『特別』で、『神に選ばれし者』だ」

至極真面目な表情で、博士は続ける。

「彼は過去の出来事によって、一度は深く心を病んだ。今でも、ふとした瞬間に精神状態が不安定になってしまう。——そして、精神的に不安定になると、その代償として様々なことが起きる。例えば、神機との適合率が大きく変動したり、超人的な身体能力を発揮したり、ね」

「……そんなこと、あるんですか……？」

「だから彼は『特別』なんだよ。それにキミだって、目の前で見たんだろう？ スイウくんの、常人離れた動きと、標的への執着を」

サカキ博士は立ち上がり、室内をゆっくりと歩き始めた。

「イロハくん。本当にスイウくんのことが好きなのなら、少し距離を置いた方がいい」

「何ですか……？」

「知りたくないことを知ってしまつて、互いに傷つくかもしれない。彼は、キミや僕たちとは違う。『特別』なんだ」

——キミとは違う。

「イロハくん。最後に一つ、聞きたいんだけど——」

研究室を出る前、サカキ博士は訊ねた。

「——キミは、この世で最も酷い裏切りつて、何だと思つ？」

蒼穹の月（前書き）

ねもいです……。

蒼穹の月

……

「あれ……？」

受注された任務の確認をしていたヒバリは、書類をめくる手を止めた。首を傾げて、ファイルから取り出した二枚を見る。

「んー……やっぱり、変……かな」

何かの手違いだろうか。それとも――

蒼穹の月

「――離れて！」

距離を取って狙撃していたサクヤが、攻撃の予備動作を見て取って叫んだ。スイウとソーマが離れると、敵を中心に電撃が放たれる。

今回の任務の標的は、ヴァジユラ。

虎に似た容姿を持った、大型のアラガミだ。背中には、電撃を放つマント状の器官がある。驚異的な脚力を持ち、巨体からは想像で

きない俊敏な動きを見せる。

「ちっ……」

跳びかかってきたヴァジユラを、ソーマは装甲で防いだ。盛大な土煙が上がり、一瞬視界が奪われるが、それを切り裂いて斬撃を見舞う。切っ先が前足を捉え、ヴァジユラはよろめいた。

「やあっ！」

スイウは段差の上から跳躍し、ヴァジユラの背中を狙った。普段はマントに隠されている、弱い部分を突き刺す。軽やかに着地したスイウは、一気に畳みかけようと深く踏み込んだ。しかし、ヴァジユラは突然、狙撃に専念していたコウタに向かって突進した。それに巻き込まれたスイウは軽々と吹き飛ばされ、地面を転がり、段差にぶつかって止まった。

「っ……コウタくん！」

「うわああっ!？」

跳躍して一気に距離を詰めてきたヴァジユラを、コウタは辛うじて回避したかに見えた。しかし、ヴァジユラの着地と同時に行われた放電を喰らってしまう。

「ちっ……」

ソーマが背後から接近し、「イーブルワン」が太い尻尾を抉^{えぐ}った。尻尾が結合崩壊する。

「一旦体勢を立て直してっ、畳みかけるわよ！」

サクヤが背中中の弱点部位をレーザーで打ち抜きながら、指示を飛ばす。コウタとソーマが神機を構え直して距離を取り、スイウは入れ替わりに接近した。ヴァジュラの動きに合わせて位置取りを変えながら、連続攻撃で一氣にホールドに持ち込む。動きを封じた状態で、全員からの一斉攻撃で畳みかけた。

……

贖罪の街。

銃形態の神機を構えたアリサは、リンドウの後について歩いていた。

「……これは、いよいよキナ臭くなってきたな……」

リンドウが呟いた。その横顔を見て、アリサの脳裏に一瞬、過去の光景が蘇る。

「——どうかしたか？」

「い、いえ……問題ありません。側面、後方共にクリアです」

「そうか……進むぞ」

教会の周りを確認するために、反時計回りに歩いていく。アリサが頭を軽く押さえていると、突然、リンドウが立ち止まった。目の

前に現れた人物たちに、アリサも目を見張る。

「何？」

「お前ら？」

ソーマとリンドウが顔を見合わせ、不審そうに眉をひそめた。

「あれ？ リンドウさん、何でここに！？」

「どうして同一区画に二つのチームが……。どういうこと？」

コウタとサクヤも疑問を口にする。ただ一人、スイウだけは、どこか別の方へ意識を向けているようだった。瞼を少し閉じて、何かを探すようにゆっくりと周囲を見回している。

「考えるのは後にしよう。さっさと仕事を終わらせて帰るぞ。俺たちは中を確認。お前たちは外を警戒。いいな」

リンドウがアリサを促して歩きだした。その後が続こうとしたアリサを、スイウが遠くを見つめたまま呼び止める。

「大丈夫……？」

「何がですか」

「……いや……何でもないよ。気をつけてね」

「？」

アリサは首を傾げながらも、大人しくリンドウについていった。その背中を見送って、スイウたち四人は教会の周りを警戒する。辺りは静寂に包まれていて、特にに異変は感じられない。

「！」

突然、スイウが駆けだした。一瞬遅れて、ソーマも顔を上げ、舌打ちする。

「しまった……」

……

一方、リンドウとアリサは、慎重に教会の中へと入っていった。そこで、不意に響き渡った咆哮に振り向く。崩れた壁の上に、ステンドグラスの光に照らされて、一体のアラガミが佇んでいる。

女王——プリティヴィマータ。

スイウたちが相手にしていたヴァジュラに似た形状を持つアラガミだ。雷ではなく氷で攻撃を仕掛けてくる。特徴的なのは、不気味な人に似た顔。

「下がれ！ 後方支援を頼む！」

リンドウが神機を構え、後ろにいるアリサを振り向いた。しかし

「っ！」

アリサの脳裏に、再び過去の光景がフラッシュバックする。

「パパ……！？ ママ……！？ ……やめて……食べないで……」

「アリサあ！ どうした！？」

リンドウは一人で戦いながら、様子のおかしいアリサに訊ねる。
だが、アリサはそれに答えることなく、入口付近まで後退した。頭に響いてくる幻聴を振り払おうと、頭を振る。

アリサは、戦闘中のリンドウに銃口を向けた。

——そうだ！ 戦え！ 打ち勝て！

リンドウが、プリティヴィマータの攻撃を喰らった。後方に吹き飛ばされ、地面を転がって起き上がる。

——こう唱えて引き金を引くんだ……
アジン オジン、ドウバア ドバ、トリ トリ！

「引き、金……を……」

——
アジン オジン……ドウバア ドバ……トリ トリ……

——そうだよ。そう唱えるだけで、キミは強い子になれるんだ。

「……
アジン オジン……ドバ ドバ……トリ トリ……」

アリサは呟き、リンドウの動きに吸い寄せられるように、銃口の

向きを変える。

フラッシュバックする光景。そこには、とある神機使いの顔写真があった。

——こいつらがキミたちの敵、アラガミだよ！

——アラガミだよ！

——キミのパパとママを喰らった、アラガミだよ！

アリサは引き金にかけた指に力を込め——

（混乱しちまったときはな、空を見るんだ）

「いやあああああつ！ やめてええええええつ！！！」

——引き金を、引いた。

失敗作（前書き）

身体中が限界です……。

失敗作

異変に気づいたスイウは、教会の入り口へと駆けた。そこでは、戦闘中のリンドウに、アリサが銃口を向けていた――。

「アリサ！」

「いやあああああつ！ やめてええええええつ！！」

駆け寄るスイウの目の前で、アリサは絶叫し、真上に向かって引き金を引いた。立ちすくむアリサの上に、崩れた天井の瓦礫が降り注いでくる。

「危ないっ……！」

スイウはアリサの身体を教会の外側に引っ張り、自分は中に転がり込んだ。スイウが初めて相対するアラガミと戦っているリンドウが、背後での轟音に振り返る。

「スイウ！？ 一体何が……」

「アリサが……」

「！……まさか……」

何か事情を知っているらしいリンドウに訊ねようとしたが、スイウは目の前の敵に意識を向けた。ヴァジュラを倒した後感じていた気配は、こいつ――

――違う。

「リンドウさんっ……外にもいます！ 二、三——五体！？」

……

「あなた、一体何を！？」

サクヤは、崩れ落ちた瓦礫の前で座り込んでいるアリサに駆け寄った。

「……違う……違うの……私じゃ、ない……パパ……ママ……私じゃ……」

うわ言のように繰り返すアリサから視線をそらし、サクヤは瓦礫の山に銃口を向けた。しかし、打ち出されたレーザーは呆気なく弾かれ消えてしまう。

「くそ……こつちも囲まれてやがる！」

「なんなんだよ、こいつら！」

ソーマとコウタが、教会を取り囲むようにして現れたプリティヴィマータたちを牽制する。瓦礫の向こう側から、リンドウの指示が聞こえてきた。

「サクヤ！ アリサを連れて、とつとアナグラに戻れ！」

「でもっ……」

「これは命令だ！」

「っ……行こう！ このままじゃ、みんな共倒れだよ！」

渋るサクヤの腕を、コウタが引つ張つて促す。ソーマ一人で牽制しているが、すぐに限界が来てしまつたろう。

「サクヤ、人員を統率！ ソーマ、退路を開け！」

ソーマは反撃を喰らいながらも、女王の群れに突っ込んでいった。ソーマが注意を引いている間に、コウタがアリサに肩を貸して教会を離れる。なかなか動こうとしないサクヤに、ソーマが声を荒げる。

「おいっ、さっさと逃げろ！」

「いやっ……いやぁ……」

サクヤの頬を、涙が一粒伝った。

「リンドウ——っ！！」

……

「——ふう……」

プリティヴィーマータの屍骸を横目に見て、リンドウは溜息をついた。壁にもたれて座り込み、隣で荒い呼吸を繰り返しているスイウ

に言う。

「大丈夫か？」

「……平気、です……」

「……どうして、中に入って来たんだ？」

「アラガミに囲まれてるのが、分かったから……それに、アリサの様子も、なんだか変でした……」

アリサたちが帰った後。スイウとリンドウは、この狭い教会の中での戦闘を繰り返していた。先にヴァジュラとも戦っていたスイウは、すでに体力が限界を迎えている。立ち上がるのもやっとの状態だった。

「スイウ。……一つ、訊いてもいいか？」

「何ですか？」

「お前のことだ」

リンドウは煙草の煙を吐き出して、訊ねる。

「プリティヴィマータがいることに、一体いつから気づいてた？」

「何か気配は感じてましたけど……結局、ギリギリになるまで確信は持てませんでした」

「気配、か……。お前さっき、外にいるやつらの数まで把握してた

な。気配だけで、そこまで分かっちゃもうもんなのか？」

「はい」

「……そうか」

リンドウはしばらく黙りこみ、何か言おうとして口をつぐんだ。それから、言いにくそうに呟く。

「お前には悪いと思ったが、調べさせてもらったよ。スサノオのこ
とや、それに関する精神状態についてはもとから話は聞いてたが――」

そこでまた、リンドウは言葉を切った。スイウは質問の内容に確
信を持っていたが、しかし、黙っている。

「――スイウ……お前は、ソーマと同じ……」

「違います」

リンドウを遮って、スイウは否定した。思いもよらず強い口調で
言ったことに自分で驚きながら、スイウは少しだけ震えている声で
言う。

「確かに、似てます。だけどボクは……ソーマさんとは違います。
ボクは……」

ボクは、「失敗作」なんです――と。

スイウは、そう言った。

「……………」

スイウの言葉に、リンドウは黙り込んだ。重苦しい沈黙の中、スイウは続ける。

「ボクは、本当の両親の顔を知らないんです。あんなに好きだったお姉ちゃんとも……血は繋がっていなかった……」

スイウは、ある実験における「失敗作」だ。

「ソーマさんが生まれた後も、実験は行われていたんです。実験場所を、フェンリルから別の場所へと移して」

「そんなこと……誰から聞いたんだ？」

「支部長とサカキ博士から——すべて」

「……そうか」

リンドウの呟きと共に、スイウは顔を上げた。ふらつきながら神機を支えに立ち上がり、やって来た新手のアラガミを見上げる。リンドウは煙を吸い込み、タバコを投げ捨てた。

「ちょっとくらい、休憩させてくれよ……身体が持たないぜ」

スイウの前に出て、リンドウは「ブラッドサージ」の切っ先をアラガミ——ディアウスビターに向ける。

「獲物が弱つてるところを狙うなんて、『帝王』が聞いてあきれる

ぜ？」

「……リンドウさん」

「ああ、任せる。自分の命令ぐらい、守ってやるさ」

「はいっ……！」

リンドウは一度、スイウの頭を撫で、咆哮を上げる「帝王」に向かってニヤリと笑った。

「とにかく生き延びろ。それさえ守れば、後は万事どうにでもなる」

リンドウは、自らに言い聞かせるかのように、呟いた。

敗北（前書き）

皆さんこんにちは、筋肉痛で動けなくなってるイチゴダイフクです。

なんだかんだいって、久しぶりの次話投稿です。いやあ、もうすぐ夏休みですよ！

明後日からは、学校を公欠して自転車の合宿です。また怪我したら洒落にならないですね……

敗北

「——スイウ！」

スイウは突進を喰らい、吹き飛ばされた。地面を壁際まで転がって、「獣剣 陽」を構え直して立ち上がる。こちらに背を向けたままのディアウスビターに斬りかかろうとして、膝から崩れ落ちた。

「っ……あ、れ……？」

「スイウ、お前は援護に専念しろ！」

リンドウが、ボロボロに傷ついた身体に鞭打って攻撃する。しかし、その剣を振る腕も、すでに力なく弾けてしまった。閉ざされた教会の中、深い絶望が二人の心を覆っていく。

「……なんで……」

体勢を崩したリンドウと入れ替わりに接近して戦いながら、スイウは呟いた。悲痛な響きを含んだ声で、繰り返す。

「……なんで、見えないの……？」

視界に映る景色が、いつも見えている景色と違う。いつものように、アラガミの動きを先読みできない。身体のキレが鈍い。重い。心は酷く乱れているのに、感覚が研ぎ澄まされない——知覚の加速も起きない。アラガミの動きが、見切れない。

「スイウッ……！」

「っああ!!」

人間とは比べ物にならない巨体が、目の前に迫っていた。細い身体を衝撃が駆け抜け、スイウは為す術もなく宙を舞う。壁に身体を強かに打ちつけ、受け身を取ることもできずに落ちた。

「う……あ……」

——勝てない。

……

「——スイウ!」

名前を呼ばれて、スイウは目を覚ました。傷だらけの冷たい身体に、暖かな温もりを感じる。うつすらと瞼を開くと、イロハが今にも泣き出しそうな表情で見つめていた。スイウを抱き起こして、イロハは訊ねる。

「ねえっ、大丈夫? 早く止血しないと……あっ、足、折れてる……」

「イロハ、取り乱すくらいならアナグラに帰れ」

ソーマの声が聞こえた。首をひねって視線を巡らすと、ソーマと、その横にカノンが立っていた。

「みんな……なんで……？」

「二人が帰ってこないから、捜しに来たの。命令は無視しちゃったけど……」

カノンが事情を説明してくれた。しかし、そこでスイウは、気づく。

「……リンドウさんは……？」

沈黙が降りた。

「ねえっ、イロハ……リンドウさんは、どこ……？」

リンドウがいない。

スイウは無理やり身体を起こそうとして、全身の痛みに呻いた。イロハに抱き留められ、その腕の中でもう一度訊ねる。

「リンドウさんは……どこに……」

「いない」

ソーマが、怒りを孕んだ声で吐き捨てた。

「いないんだよ。あの馬鹿が、このフィールドのどこにも……な」

スイウの側には、リンドウの神機の破片と、あちこちが裂けた上着のみが残されていた。

……

アナグラは、暗く重たい沈黙に支配されていた。

神機使いが戦場で死ぬことは、珍しいことではない。むしろ、ツバキのように生きて無事に引退した者はごく少数だ。だから皆、エリックのときのように悲しみはしても、すぐに気持ちに区切りをつけられる。

だが——リンドウの場合は、違った。

この支部で最も生き残るのが上手いとされていた、第一部隊のリーダーが、行方不明。

同行していた「新型」の一名が精神的に不安定な状態に陥り、面会謝絶。もう一人も重傷を負ってしまうという最悪の状態だった。

「——何故ですかっ！」

タツミが声を荒げた。理解できないと首を振り、普段なら絶対に逆らいはしないツバキに反論する。

「俺たちも、リンドウさんの捜索に協力させてください！」

「駄目だ」

必死に訴えるが、いとも簡単に切り捨てられてしまう。

「すでに捜索隊が派遣されている。リンドウのことはそちらに任せ
て、お前たちは任務に集中しろ」

「でもっ、リンドウさんには、これまで何度も助けられてきたんで
す！ だから——」

「カノン。先日の命令違反で、嚴重注意を受けたのを忘れたのか？」

「っ……」

指摘されて、カノンは悔しそうにうつむいた。講義に集まった面
々を見回して、反論がないことを確認すると、ツバキは黙って踵を
返した。

「くそっ……俺たちはリンドウさんに、何もしてやれないのか……」

ツバキの姿が見えなくなってから、タツミが悔しげに呻いた。壁
を拳で力任せに殴りつけ、タツミもその場を後にした。

敗北（後書き）

そういえば！ GOD EATERの二作目が出るそうですね！
バーストでしたっけ？ 楽しみですねえ…… まあ、金がないんで
すけど……。

依頼（前書き）

いやあ、暑いですね！ 夏ですね！ 今日も部活で、百キロくらい走ってきましたあ……ふう。

……あつ。明日、補習だった……。

依頼

……

イロハが病室を訪ねると、スイウは包帯に巻かれた脚を吊って、ベッドに上体を起こしていた。身体中に包帯やガーゼ。もともと白かった肌は青白く、頬もやつれている。

「……スイウ……」

イロハはなるべく明るく声をかけようとしたが、自然と声が震えてしまった。もう一度呼びかけてみるが、スイウは全く反応しない。イロハは椅子を持ってきてベッドの側に座り、スイウの冷えた手に自分の手を重ねた。

「大丈夫だよ……」

気休めにもならないと分かりながら、イロハは励まそうと言葉を探す。スイウの手をしっかりと握って、声を絞り出す。

「……だって、あのリンドウさんじゃない。きっとビールの配給日にでも、ひょっこり戻ってくるって」

「……………」

反応は無い。大きな瞳は虚ろなまま、隣に座るイロハの姿も映り

はしない。

「搜索隊だって派遣されてるんだし……ね？　だから――」

「……イロハ……」

注意していなければ聞こえないような、小さなかすれた声でスイウが呼んだ。スイウがようやく口を開いたことに安堵しながら、訊ねる。

「何？」

スイウはイロハの手を握り返し、その暖かさを確かめるように指を絡める。

「……ずっと側にいるって、約束してくれたの……覚えてる？」

「覚えてるよ」

「そっか……よかった……」

少し震えている声に、イロハは首を傾げる。

「どうしたの？　スイウ……」

「ん……何でもないよ」

ぎこちない微笑を浮かべる。絡めた互いの指を解きながら、スイウは言った。

「サカキ博士を、連れて来てくれる？」

……

「やあ、スイウくん。大変だったね」

サカキ博士は椅子に腰かけず、壁際に立ったまま声をかけた。続いてイロハが部屋に入ってくるが、スイウは申し訳なさそうに言う。

「ごめん、イロハ。博士と二人で話したいんだけど……ちょっと、外に出てて」

「？ ……うん」

イロハが退室し、扉が閉まると、サカキ博士は訊ねた。

「彼女がいたらできない話なんだね？」

「……………はい」

「そうか」

博士はそれ以上追及せずに、スイウの言葉を待つ。しばらく沈黙が続いた後、ようやくスイウは訊いた。

「リンドウさんの神機——ブラッドサージは、直りますか？」

「直るも何も、半分以上が失われているからね。コアも無いし、修

理のしようがないみたいだ」

「そうですか……じゃあ、上着は……？」

「あつちはまあ、何とかなるんじゃないかな。あちこち破けたりはしているけれど、修理は可能だろう……あとで手配しておくよ。サイズは、キミの身体に合わせるかい？」

「……分かってたんですか」

「まあね」

「……じゃあ……」スイウは少し迷って答える。「リンドウさんのサイズのままでお願いします」

「分かったよ。——じゃあ、用はこれだけかな？」

まだ本題を話していないことを知っていて立ち去ろうとする博士を呼び止める。

「待ってください……博士には、お願いしたいことがあるんです」

イロハやコウタたちには頼めない。きっとみんな、止めようとするに決まっている。——でも、サカキ博士なら……

「急ぎの用かな？」

「いえ……ボクはまだ動けませんから、まだ少し先になると思いますけど……」

「……ふむ。それで、何をすればいいんだい？」

こちらの考えを見透かすような視線を受け止めて、スイウは決意を込めて言う。

「手配してもらいたいことがあります」

幕間？ とある神機使いの夕方（前書き）

読者の皆様、どうかワタクシの愚痴を聞いてやってくださいまし

……

「夏休みの宿題、全然終わんねええええええつ！！！！！」

……ごほん……失礼いたしました。

幕間？ とある神機使いの夕方

とある神機使いの夕方

トラックの荷台の上で揺られながら、”彼女”は空を見上げた。そろそろ日が暮れる。今日も無事に乗りきることができた。

手元には一つの神機。彼女は神機使いで、今は護衛任務の最中だった。

「……ん……？」

前方を眺めた彼女は、路肩に転がった何かを見つけた。

「ねえ、止まって！」

荷台から身を乗り出して、全開になっている運転席の窓へ叫んだ。大柄で無骨な身体つきの男が首を傾げる。

「あん？ どうした、神機使いさん」

「なんか、前の方に………っ！！」

首にぶら下げた双眼鏡を覗き込んだ彼女は、慌てて荷台から飛び降りた。

⋮

単独任務（前書き）

どうもどうも、イチゴダイフクです。こんにちはあゝ。

えー、明日から実家に帰省します。一週間くらいですかね。一応、幾つかストックはあるので、その間も何度が投稿できると思います。が……。

ああ！ それにしても楽しみだ！ 美しい水着の女性が待っている！

……いえ、何でもありません^^；

単独任務

……

リンドウの失踪から三週間。

驚異的な回復力で任務にも復活したスイウは、アリサの病室に向かった。区画移動用エレベータを降りると、廊下の向こうから悲鳴が聞こえてきた。

「見ないで——もうほつといてよ……来ないでっ……私なんか……私なんか——」

「鎮静剤を。クッションを交換しておけ」

病室を訪ねているのだろっ、ツバキの落ち着いた声も聞こえる。スイウはゆっくりと、病室の前まで歩いていく。その間も、アリサの悲痛な叫びは続いている。

「ああ……ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ——パパ……ママ……私……違う！ 違うのっ——」

「私だ……分かるか？ アリサ」

「そんな！ そんなつもりじゃなかったの——！ 違うの！ 私じゃない——！ 私のせいじゃないっ……——！！」

胸の奥が、ずきりと痛んだ。一度アリサに会っておこうと思ったのだが……

「——キミ」

不意に後ろから声をかけられた。振り向くと、スイウも知ってる医師——オオグルマが、悲痛そうな表情で立っていた。

「今は会わない方がいいだろうな……薬が切れるとあの調子だ。日を改めた方がいいぞ」

「そうみたいです……また、機会があったら訪ねます」

今日はこれから、ツバキに呼ばれている。スイウはオオグルマに会釈してすれ違い——

「っ?」

——立ち止まった。

「どうした?」

「いえ……まだ怪我が治ったばかりなので、足がちょっと……」

「そうか。キミの回復力には驚いたが、くれぐれも焦らないようにな」

「はい。ありがとうございます」

違和感の正体を気にしながらも、スイウはエレベータに乗り込んだ。

……

梅雨真っ只中の今日は、やはり雨が降っていた。初めて立ち入ったツバキの部屋で、ソファに座ったスイウは窓の外から目を移す。目が合うと、ツバキは事務的な口調に不快感をにじませて訊ねてきた。

「任務に復帰してくれたことには感謝するが、近頃、出撃回数が急激に増えているな」

「……そうですか……？ 気のせいじゃ——」

「とぼけるなっ」

声にわずかに怒気をにじませ、ツバキは書類をテーブルに叩きつけた。散らばったそれらに瞬時に目を通し、スイウはどこか寂しそうな顔をした。しかし、何も言わない。その沈黙が、ツバキの神経を逆なでしたようだった。

「回復後の任務……一日にいくつも、一度や二度では済まない回数の任務を受注しているな？」

「怪我していた間、休んでしまった分を取り戻したくて……でも、すべて無事にこなしていますし……」

「だが、どれも単独で出撃しているというのは、一体どういうことだ」

「っ」

スイウの表情が強張った。それから悲しそうに眉根を寄せて、うつむく。

「最初こそイロハが同行していたが、二日目以降は毎回単独での出撃だ。……もう一度訊く。これは、どういうことだ？」

「……………」

「答えるっ！」

ツバキは身を乗り出すと、スイウの襟を掴んでひねり上げた。潤んだ瞳をキッと睨みつけ、スイウを力いっぱい揺さぶる。

「ペイラー博士は何を企んでいるんだ！！ リツカたち技術部員が秘密裏に開発している神機は何だ？ なぜ、リンドウの神機の残骸が紛失した！？ ……すべて、お前が関わっているんじゃないのかっ！？」

ツバキの視線を受け止める。スイウは泣きそうになっているのを隠して、毅然とした口調で言った。

「はい」声が震えないように気を付ける。「ボクが博士にお願いしたんです」

「……………お前はっ……………何を企んでいる？」

「企んでるだなんて……」

スイウはツバキの手をそつと払い、立ち上がった。以前よりも長くなつた髪を揺らし、踵を返して立ち去る。

扉の前で立ち止まって、一度振り返つた。

「イロハのこと——みんなのこと、お願いします」

深く頭を下げて頼むと、スイウは早足で部屋を出ていく。もう、後ろを振り返ることはなかった。

旅立ち（前書き）

どうもどうも、イチゴダイフクです。

実家の方からの投稿ですね。台風が近づいてるせいで、海にいけな
いです……

旅立ち

……

夜。スイウの部屋。

「——でも、よかった……スイウが元気になってくれて」

ソファに座ったイロハは、片目を細めて穏やかに微笑んだ。スイウはキッチンから持ってきたカップをテーブルに並べながら、わずかに頬を染める。

「イロハのおかげだよ……みんな辛いときだし、きっと、ボク一人じゃ立ち直れなかったと思う……」

「そ、そんなこと……照れちゃうじゃないっ」

隣に腰をおろしたスイウから、恥ずかしそうに顔をそらして、イロハは紅茶を口に運んだ。ちらと横目で見つめてくるイロハの姿に、スイウは微笑を受けて――

「……スイウ……どうしたの？」

——その頬を、一粒の雫が伝った。

「っ……ぐすっ……う……」

涙は次々と溢れてきて、少女のような顔を瞬く間に濡らした。細い指先で涙を拭い、嗚咽するスイウに、イロハは訳も分からず訊ねる。

「どうしたの？ 何かあったの？ …… ねえっ、スイウ…… 泣かないで……」

腕をまわして抱き寄せて、互いの頬の触れあう距離で、優しく囁く。

「ねえ…… なんかスイウ、最近ヘンだよ？ いつも一人で任務に行っちゃうし、すぐに泣いちゃうし……」

柔らかな髪を撫でながら、イロハは自分も泣き出しそうになっているのを必死にこらえていた。離してはいけない——離れたら、もう会えない——そんな嫌な予感に胸が潰されそうになって、細い身体を力いっぱい抱きしめる。

「ねえ、スイウ…… どこにも、行かないよね？ 約束、したよね……？」

「う……………」

「スイウッ——」

「いめん」

悲しい眩きが、耳朵を打った。

抱きしめ返しながら、スイウはもう一度謝る。

「ごめん、イロハ……」

「な、んで……謝るの……」

頭がうまく働かないことに、イロハは気づいた。視界の端には、スイウがキッチンで淹れてきた紅茶のカップ――。

「大丈夫。約束はちゃんと守るから……だから、待ってて。……お願い」

「……スイウ……待って……ねえっ……」

涙のせいかな、それとも薬のせいかな、視界が揺らぐ。抱きしめる腕から力が抜けていって、強烈な眠気に襲われる。

「ありがとう……彩葉」

初めてのキスは、悲しい涙の味がした。

「待って……私を、置いてかないでよ……」

……
スイウ
翠雨。

大切な彼の名を呼ぶ前に、イロハの意識は途切れた。

……

旅立ちの今日も、天気は雨だった。

「引き留めはしないけど、本当によかったのかい？」

唯一の見送りであるサカキ博士は、相変わらず考えの読めない表情で訊いてきた。

「……これで、よかったです」

泣きはらして赤い目をしたスイウは、修理してもらったリンドウの上着を羽織る。やはり丈が大きい。彼のように腕まくりをして、次に、改良を施された神機を手にする。

「リンドウくんの神機の残骸から、使えそうな部分を探してね。それらに、キミが短期間で集めてくれた素材を合わせて作ったんだ」

ショートブレードにしては少し長めの刀身はダークレッド。派生元になっている「獣剣」を細く、長くしたような外見になっている。シユウの翼爪がもとになっている刃はより鋭く伸び、峰にも牙のような棘がついていて殺傷力を高めている。

「——じゃあ、そろそろ行きます」

エンジンをかけたまま待機している輸送装甲車へ、スイウはつま先を向けた。

「ありがとうございました。こんな我がままと聞き入れてもらって

……」

「いや、このくらい構わないさ。無事に目的を達成できることを、祈ってるよ」

「必ず帰ってきます……イロハとの約束もありますから」

また泣き出しそうになっているのを見て取って、サカキ博士は言う。

「彼女は強いよ。きっと大丈夫だろう」

「はい。……本当に、ありがとうございました」

上着の胸元を掴んで、スイウは車へと歩き出した。掌から、リンドウの鼓動が、言葉が伝わってくる。

——とにかく生き延びろ。

「……生き延びろ」——それさえ守れば、あとは万事どうにでもなる。

「あとは万事、どうにでもなる……」

リンドウの言葉を繰り返し、スイウは座席へ乗り込んだ。運転席から、すでに退役した神機使いである百田ゲンが声をかけてきた。

「別れの挨拶は済んだか？」

「お別れじゃないです。ただ、ちょっと出かけてくるだけですよ」

「そうか……そうだな」

スイウよりもずっと年上、六十二歳の男は、重く低く呟いた。

「よし、行くぞ」

「はい」

装甲車は、まだ先の見えない暗い夜道を、スイウを乗せて進んでいく。

……

梅雨のある日。

こうして、神矢スイウはアナグラから姿を消した。

揺れるアナゲラ（前書き）

台風で遊べません……

揺れるアナグラ

「待ってよ、ツバキさんっ！ あいつは……スイウは一体、どこに行っちゃったんですか？」

苛立ちを隠せずにいるコウタが、立ち去ろうとしたツバキを呼び止めた。

スイウ失踪の翌日。病室にいるアリサを除いた第一部隊の面々は、スイウがアナグラを出ていったことを知らされた。

「博士や支部長に訊ねたが、何も知らされていない」

「そんな……」

コウタが口を閉ざし、エントランスに沈黙が降りた。ツバキはそのままエレベーターの中に消え、イロハも再び泣き出してしまった。

「……イロハちゃん……」

声をあげてなくイロハの手を取って、サクヤが部屋に戻ろうと促す。カウンターで聞き耳を立てていたヒバリも、どうしたらいいのか分からずにいる。そんな場の雰囲気になえきれなくなって、コウタが無理やりに明るい声を出した。

「だっ、大丈夫だって！ スイウならきつと、無事に帰ってくるよっ！ ……あ、もしかして、リンドウさんを捜しに行ったのかも……なら、二人とも一緒に帰ってくるんじゃない——」

「やめろ」

「なっ……」コウタは一瞬、言葉に詰まった。「……んだよ、ソーマー！」

「根拠のない希望的観測はやめろ……そう言ってるんだ」

フードをかぶり、その下から上目遣いに睨みつけながら、ソーマは言う。

「あの馬鹿リーダーのことなら、とつくに搜索隊が派遣されただろうが。そのくらい、馬鹿のお前でも分かってるだろ」

「でもさあつ」

「スイウはお前たちとは違う。お前たちじゃ、理解なんてできないんだよ」

「っ……！」

静かだが鋭い言葉に反応して、エレベータに乗ろうとしていたイロハが立ち止まった。自分の身体を抱きしめて震える彼女の隣で、サクヤがソーマを振り返った。

「ちょっとソーマ、そんな言い方ないじゃない……！」

「事実だ」

「なら、お前には分かるのかよ！ ソーマッ！」

掴みかかってきたコウタを、まるで見透かしていたようにかわし、
がら空きの腹に蹴りを叩きこんだ。ブーツの踵がしたたかに打ちつ
けられ、コウタは呻きながら床に転がった。

「ぐっ……う……」

ソーマは憐れむようにコウタを見下すと、足早に立ち去った。そ
の口元が、分かるさ——そう呟いていた。

イロハとサクヤも部屋に戻って、コウタとヒバリが残された。

「——あの、コウタくん……大丈夫ですか……?」

「……っっ……」

ヒバリに手を貸され、コウタは立ち上がった。しかしその手もす
ぐに振り払い、苛立たしげに歩き去る。

「ソーマも……スイウも、アリサも、リンドウさんも……どうな
ってるんだよっ!」

……

夕方。仕事を早めに切り上げて外に出ると、久しぶりに雨が上が
っていた。

「はぁ……」

「よっ、ヒバリちゃん!」

後ろから、しばらく聞かなかった声が聞こえた。

「あ……タツミさん」

「ほら」

「ありがとうございます」

差し出された缶コーヒーを受け取った。熱い缶を両手で弄びながら、黙ってうつむく。

「元気ないね……って、当り前か」

訊ねてから、タツミは自嘲気味に笑った。しかしその笑みも、依然暗いままのヒバリの表情を見て消えてしまう。

「——聞いたよ……リンドウさんに続いて、スイウもいなくなっちゃったって。アナグラ中でウワサになってる」

「はい……」

「……あーあ……つたく、参っちゃうよ。任務は忙しくなる一方だし、主要メンバーは前線から消えいくし。……ごめん、ヒバリちゃんに愚痴ってちゃ駄目だよな……」

実際に戦闘を行うわけではなくても、アナグラの仲間の一人なのだ。何度経験しても、大切な仲間がいなくなってしまうのは辛く、耐えがたい。

「……タツミさん」

「何？」

「タツミさんは、大丈夫ですよ？　突然いなくなったりなんか……
……しません、よね……？」

普段とは違う、沈んだ声。一瞬、タツミは返答に詰まってしまった。

あのリンドウやスイウでも、突然にアナグラからいなくなる。任務中の予期せぬトラブルであったり、防衛班長程度の階級では知られることのない、特別な任務であったり――

「――……俺は……大丈夫だよ」

根拠のない、薄っぺらな言葉だと、自分でも分かっている。でも、それしか言えないのだ。

もつと強くなって、強くなって――自分を待っていてくれる人のもとに、必ず帰ってこられるようになるときまで――そのときまで、「大丈夫」としか言えない。

「本当ですか？」

「ッ……ちよっ――」

「本当に、大丈夫ですか？」

不意にヒバリが近づき、すぐ側で上目に見つめてきた。いつものはぐらかす様な態度に慣れていたため、タツミは予想外のことに戸惑う。

「タツミさんは、ちゃんと帰ってきますよね……？」

「ヒバリちゃん——」

タツミは、腹をくくった。

引き締まった両腕を、ヒバリのか細い背中に回して引き寄せる。

「——俺はいつでも、必ず帰ってくるよ。アナグラに……」

……そして、ヒバリのところに。

「あ、そうですかあ」

「……………へ？」

ヒバリの反応は、予想外に軽かった。先ほどまでの暗さは消えて、いつもの明るい笑顔に戻っている。

——また、逃げられた……？

「え、と……その、ヒバリちゃん……？」

「あつ。私、まだ仕事残ってました！ もう戻りますね」

「ええっ!？」

せっかく頑張ろうとしたのに……いつになれば進展するのだろうか。

「……うん、じゃあまた明日……」

「はいっ。明日も頑張ってくださいね」

そう言ってヒバリは、晴れ間に現れたお日様のように微笑んで、タツミの頬にほんの僅かに唇を触れさせた。……… 本当に、悲しくなるくらいちょっとだけだったが。

「さっきの、『いつでも必ず帰ってくる』って言葉、約束ですからね！ ぜったいですよっ！」

嬉しそうに立ち去るヒバリを見送って、タツミは空を見上げた。

長い梅雨はまだ明けそうにないが、それでも、梅雨にだって晴れ間はある。そのわずかな光を頼りに、仲間のために、頑張ってみよう。そう思えた。

クラックサニディン（前書き）

ただいまあ、イチゴダイフクです！

今日の明け方、ようやく実家から帰ってきましたよ！ 飛行機ではなく自動車と船で行ったため、かなりの時間がかかりました……ふう。

部活が休みなので、今のうちに続きを書かないと……。

クラックサニディン

エントランスを出た後。サクヤに寄り添われて、イロハは自室に戻っていた。

「大丈夫？」

「はい……もう、大丈夫です……」

ようやく泣きやんだばかりのイロハは、まだ震えている弱い声で呟いた。

「大変なのは、みんな同じなのに……すみませんでした」

リンドウがいなくなって、サクヤもはいまだ辛い思いをしている。自分ばかり泣いてはいけない——そう思って、イロハは目じりに残っていた涙を指先で払った。

「いいのよ、別に……。悲しいときは、好きなだけ泣いたって」

「だけどっ、サクヤさんだって——」

——リンドウさんのこと……！

「私はもう大丈夫よ」静かに遮って、サクヤは微笑む。「だって、あのリンドウじゃない。捜索隊も派遣されてるんだし、そのうち帰ってくるわ」

——強いな……。

想い人の失踪を乗り越えた先輩の笑顔を、イロハは羨ましく思った。サクヤはもう、リンドウのことを乗り越えた——と。

このときは、そう見えた。

クラックサニディン

翌日。第一部隊の面々は、再びツバキに集められた。

「本日の任務を、『当該地域のアラガミ一掃』に変更する」

標的は、第一次討伐班が討ち漏らしたザイゴート二体とオウガテイル一体。これらが贖罪の街で活動を再開したため、討伐に向かうことになったらしい。

手元の書類を一枚めくり、ツバキは重たい溜息をついて言った。

「なお、検査中だったアリサは快方に向かいつつあるが……入院のため、しばらく前線を離れることになるだろう」

そして、「最後に……」と付け足す。

「最後に……本日をもって、神機——及びその適合者であるリンドウは、消息不明・除隊として扱われることになった。……以上だ」

「そんな……」真っ先に反応したのはやはり——サクヤだった。「

まだ腕輪も神機も見つかっていないんですよ!？」

「上層部の決定だ。腕輪のビーコン、生体信号ともに消失したことが確認されたらしい。——それに現在、未確認アラガミの活動が活発化してきていることもある」

「でもっ——」

「くどい!」

一喝。エントランスに、痛く、耐えがたい沈黙が降りた。

私はもう大丈夫——そう微笑んだサクヤは、今ではもう、涙を流して逃げだす寸前だった。そんな彼女に、ツバキの言葉が追い打ちをかける。

「今のアナグラに、生きているかも分からない人間を捜す余裕はない……っ!」

以上だ。そう呟いて、ツバキは踵を返した。ソーマも、何も言わずに立ち去ってしまう。

「ねえっ……こんなに早く搜索が打ち切られるなんておかしいわ! 襲われた敵も場所も明らかなのに……何で!？」

サクヤはコウタとイロハに向かい、悲痛な声で訴える。やっぱり無理していた……彼女を頼った自分を、イロハは責めた。

「落ち着いて、サクヤさん……」

「落ち着いて……？ 落ち着いてなんていられるはずないでしょ！？」

声をかけたコウタを突き飛ばし、サクヤはすぐに悲痛な表情になった。

「……いや……ごめん……キミに当たっても仕方ないね……」

「いや……」

「少し頭を冷やしてくる……任務には間に合うようにするから」

サクヤは早足に、エントランスを出ていった。残されたイロハとコウタは、どうしようかと互いに顔を見合わせる。

「サクヤさん……だいぶ参ってるみたいだね」

「……うん……」

「俺、リンドウさんのこと……スイウもみんなも、よくやったと思ってるよ。でもアリサのやつ、急にどうしちゃったってんだよ？」

コウタの瞳にもまた、苦悩、哀しみ——そんな感情が淀んでいる。

「お願いしても、いいかな」

「何を？」

「アリサのこと」

仲間のために、コウタは頭を下げた。

「……イロハも、スイウがいなくて辛いのは分かるけどさ……きっと、アリサも苦しんでる。だから……同じ新型なんだしさ、イロハが側にいてやったほうがいいんじゃないかって思うんだ」

俺、心配だから、サクヤさんのところ行ってくる――。

コウタを見送ってしばらくの間、イロハは立ち尽くし、動けずいた。

……

今回の任務で、イロハは怪我を負った。

大型アラガミのいない簡単な任務だったが、ちょっとした油断を突かれた。幸い軽傷で済んだが、帰り際、ソーマに毒づかれた。

「この場にいないやつのことなんて考えるな。……死にたくなければな」

感応現象（前書き）

今日は部活がお休みです！。たまには一日中、好きなことをして
過ごしたい——って、あれ？ この問題集は一体何だろう……

感応現象

任務終了後。怪我した腕の治療を済ませたイロハは、コウタに頼まれた通り、病室に来ていた。

「話しても無駄だよ。効果の高い鎮静薬が届いたんでね……当分意識は戻らないはずだ」

アリサの担当医であるオオグルマが、重苦しい口調で言った。その言葉通り、アリサは昏々と眠っている。

——一体何があつたの？　アリサ……。

血の気が失せてますます白くなった、雪のような肌。黙って見ていただけでいることに耐えられなくて、イロハは手を伸ばした。指先がアリサの手の甲に触れ——

「！」

——得体の知れない”何か”が、頭の中に流れ込んできた。

ヴァジュラ——ではないが、それに似たアラガミが、人をに喰らいつく。まだ若い外国人の男性と、次いで、同じく若い女性が捕食された。場面は次々に移り変わり、写真が現れた。胸から上をアップに写っているその男性は——

——雨宮リンドウ。

「——あれ……ここは……」

「え……………」

唐突に聞こえたアリサの声に、イロハの意識は呼び戻された。

「…………私、どうして…………」

アリサが目を覚ました。全く予期していなかったことに、イロハは驚きを隠しきれない。そしてオオグルマも、酷く動揺していた。

「い、意識が…………回復しただと？…………まさか…………し、失礼する！」

慌ただしく病室を出ていったオオグルマに首を傾げながらも、イロハはアリサに向き直った。久しぶりの笑顔で笑いかける。

「よかった、アリサ…………もう平気なの？」

小さく頷いた。しかしすぐに、再び^{まぶた}瞼が下がります。

「今、あな…………た…………の…………」

ほとんど言葉を交わすこともできないまま、アリサはまた、静かな眠りに落ちていった。

…………

オオグルマは、人気のない廊下を歩いていた。しんとした廊下に、速いリズムで刻まれる足音が響き、くぐもった声が溶けていく。

「——はい。ええ、まさか意識を取り戻すとは……。詳しくは分かりませんが、ええ……例の……」

どうすれば良いのか、途方に暮れた表情で答える。

「はい……新型同士の感応現象が起きたのではないかと……」

一瞬、人を救う医者に、暗い影が差した。

「はい、どうしましょう——隔離しますか？」

電話の向こうの指示に、思わず声が高くなる。

「……そうですかっ！ ではしばらくはこのまま……。はい。では、私はこれで」

電話をしまい、オオグルマはもと来た道を引き返していった。

幕間？ とある神機使いの左腕（前書き）

愛車^{チャリ}がぶつつぶれました……ロード用と趣味用と通学用？が三つ壊れました。通学用？のママチャリしか手元にありません……出かけれません……。

ははっ……もう笑うしかねえ……。

幕間？ とある神機使いの左腕

とある神機使いの左腕

適合試験に使用する、腕輪を装着するための装置。その前に、一人の神機使いが立っていた。

「では、そろそろ始めようか。装置の前に立って、腕輪に自分の腕を合わせて……」

「……はい」

冷静な表情を努めながらも、鼓動は速くなる一方だ。この先に待っている激痛、苦痛を想像すると、膝が大笑いしてしまいそうになる。

正直に言えば、怖い。こんな馬鹿げたこと、やっぱりやめておけばよかった。

だけど、ここで背中を向けて逃げることは許されえない。フェンリルの上層部は、この試験の結果に興味を示している。それにもとはといえば、自分で希望したことだ。

そうだ。みんなを守るためにも、逃げるわけにはいかない。

——戦えっ……！

腕輪の上に、その”左腕”を差し出した。

……

撃つ、撃つ、撃つ。

「ガアアアアッ!!」

跳びかかって来たオウガテイル——これは墮天種だ——を跳躍してかわし、空中から撃つ。頭部を撃ち抜かれ、オウガテイル墮天は動かなくなった。着地してすぐ、次の標的を見据える。横に回転し、棘を放ってきた。

「ヒュッ——」

短く鋭い息を吐き出す。バネのようなしなやかさで跳躍し、トリッガーを引く。撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ——撃つ……!

最後の一体。跳びかかりを紙一重で回避すると、がら空きの大顎に神機をねじ込んだ。銃口を目いっぱい押しつけ、冷徹にトリッガーを引く。

「——Kill my wound」

歌うように呟き、口の端を釣り上げた。

幕間？ とある神機使いの左腕（後書き）

えー……前書きで愚痴りましたが、優しく忘れてくださいませ。

明後日辺りから合宿なので、またちょっと更新が止まるかもです。
申し訳ない……。

記憶（前書き）

読者の皆様こんばんは、イチゴダイフクです。

夏休みもあと少しで終わりですかあ……………あつ！

数学と生物の宿題、終わってねえ……

記憶

……

この日の任務を終えたイロハは、もう一度アリサの病室に来ていた。今、オオグルマは席を外しているため二人きりだ。

今日来たのには目的が合った。先日、アリサの手に触れたときに流れ込んできた光景——アレの正体が一体何なのか、確かめたい。もしかしたら、リンドウやスイウがいなくなったことについて、何かが分かるかもしれない。そんな風に少し期待して。

「……アリサ」

その雪のような手に、自分の手のひらを重ねた。

記憶

声が聞こえた。

「もういいかい」

「まあただよ」

まだ若い、女性の声。そしてそれに答える、幼い女の子の声。

「もういいかい」

「まあだだよ」

「もういいかい」

「もういいよ」

わずかに開いた扉の隙間から見える風景。そこに声の主である女性と、夫だろう、こちらはまだ若い男性が、並んで歩いている。二人はこちらを見て、ほっとしたように微笑むと、一緒に歩み寄って

——喰われた。

突然、狭い視界の外から現れた牙に襲われた。何が起きているのかは断片的にしか見えない。見えない、が——アラガミに捕食されている。それだけは、はっきりと分かった。

「パパ……ママッ……！？ ……やめて……食べないで……」

震える声に気づいたのか、両親を喰らったアラガミがこちらを振り向いた。扉の隙間から、食欲という本能に満ちた視線が注ぎこまれる。

互いの、目が合った。

「いやああああああっ！ やめてえええええ……！！」

……

適合試験装置の前に立っている。

「——幼いキミは……さぞかし自分の無力さを呪ったことだろう」

試験場に響く声。これはイロハも知っている。シックザール支部長の声だ。

「アアツ——!!」

細い腕に、赤い腕輪がはめられた。激痛に悲鳴を上げ、ビクツ——と身体が震える。痛みに暴れる右腕を左手で押さえつける。

「その苦しみに打ち勝てば、キミは親の仇を討つためのチカラを得るのだ!」

床に膝をつき、歯を食いしばって苦痛に耐える。大粒の涙が頬を伝って零れ落ち、冷たい床にぶつかって弾けた。

「そうだ! 戦え——打ち勝て!」

……

どこかの病室のベッドの上。

「こいつらがキミたちの敵、アラガミだよ」

聞き覚えのある男性の声。

「アラ……ガミ?」

目の前のモニタには、ヴァジュラ系の大型アラガミの写真が表示されていた。リンドウが失踪し、スイウも怪我を負った後。イロハは、ターミナルで調べたことがあった。

女王と、帝王――。

「そうだよ。こわーいこわーいアラガミだ。そして最後に、こいつが……」

モニタが切り替わり、映し出されたのは――リンドウだった。

「……キミのパパとママを食べちゃった、“アラガミ”だ」

ベッドの上で、アリサが虚ろな声を漏らした。

「パパ……ママ……?」

酷く怯えた様子のアリサの肩に、男性の手が置かれた。温かく、励ますように囁く。

「でも……もうキミは戦えるだろう? カンタンなことさ。こいつ

に向かつて、引き金を引けばいいんだよ」

「引き金を、引く……」

「そうさ……こう唱えて引くんだ——アジン ОДИН・ドゥヴァ ДВА・トゥリー ТРИ！」

アジン ОДИН……ドゥヴァ ДВА……トゥリー ТРИ……」

「そうだよ。そう唱えるだけで、キミは強い子になれるんだ」

——強くなれる。

アリサは写真から目をそらさずに、繰り返し繰り返し数える。繰り返す度に、その声は強く、暗い思いに溢れていく。

「ОДИН……ДВА……」

男性は、声に出さずに笑っていた。

「……ТРИ……！！」

記憶？（前書き）

どうも、公道練習中に犬に突っ込まれて怪我したイチゴダイフクです。

前回の投稿から、けっこう間が空いてしまいました……すいません。十月にロードの大会と、県の新人戦トラックがあるので、その練習がありました……。

そういえば、十月はバースト発売ですね。PVを見ましたけど、なかなか気になりますね……楽しみです。

記憶？

……

アリサが目を覚ました。

「何……？ 今の……」

胸を掴んで呼吸を整えながら、アリサ軽く目を閉じた。

「今、頭の中に、あなたの気持ちが流れてきて……」目を開け、表情を不安げに強張らせて訊ねてくる。「まさか……あなたの方にも……？」

「……うん……ごめんね……」

「……いえ」

アリサは首を振って、ベッドに上体を起こした。悲しそうな——しかし、以前よりは落ち着いた目で、どこか遠くを見つめている。

「……あの日のこと……ずっと、忘れてたはずだった……」

あの日というのが、さっき見た両親が喰われた日だということとは、言われなくても分かった。

アリサはゆつくりと、話し始めた。

あの日。両親を少し困らせてやろうと、近くの建物に隠れたこと。もういいかい？ まあだだよ——と、かくれんぼのつもりだった。

「——そしたら……突然、『アラガミだ！ アラガミが来たぞ！』
って叫び声に変わって……早く出ていけばよかったのに、私っ——」

——怖くて、動けなかった。

「パパとママが……私を捜しに来たけど……っ……唸り声が聞こえて……目の前で、パパとママが……！」

悲惨な光景が、再び頭に浮かんた。それを自分の過去——片目を無くしたときと重ねて、イロハは悲しそうに眉を下げた。

「私のせいで……」

それは、両親のことなのか。それとも、リンドウのことなのか——たぶんどちらもだろうと、イロハは思った。

震える手を優しく握ると、アリサはいよいよ泣き出してしまった。

「……だから……私が『新型』の神機使いだって聞かされたときは、これでパパとママの仇が打てるって、思ったんです……なのに、どうしてっ……」

泣きじゃくるアリサの隣に座り、慰める。アリサの泣き顔を見つめながら、イロハは、どこにいるのかも分からない彼のことを想った。

——どこに^どいるの？ スイウ……

墮天の蠍（前書き）

皆さんこんばんは、イチゴダイフクです。

バーストの発売日が近いですね。いやあ、楽しみだ――

――えっ、新人戦？ ……まあ、ぼちぼちがんばります……

墮天の蠍

……

「くそっ……………マズいな」

アラガミ装甲の輸送車の中。百田ゲンは舌打ちし、何度目かの溜息をついた。

先ほど、目的地まであと十数キロの地点でアラガミに遭遇した。やり過ごすこともできたが、一般人の居住区との距離が近いこともあり、スイウが戦闘を開始。ゲンは輸送装甲車を後退させ、距離を取った。

アナグラを出てからこれまで、アラガミに出くわしたのは何度かあった。しかしどれも小型、もしくはスイウにとってはそれほどの脅威でない敵だったのだ。

そして今回も、簡単に終わるはずだった——のだが。

「なんでこんなときに……………」

車外、少し離れた所から、地響きと咆哮が聞こえてくる。スイウはまだ戦闘中で、とりあえず無事なのだろうが——このままでは、マズイ。

——敵は、ボルグカムラン。

雷の墮天種だ。

墮天の蠍

稲妻を纏った尾針が、直前までスイウが立っていた空間を貫いた。剣形態の神機を構えたスイウは、すでにボルグカムラン墮天の懷に飛び込んでいる。蠍が次の動作に移る前に、スイウは少々刀身の長いショートブレードを振った。

「——アッ……！」

ブラッドサージ譲りの、ダークレッドの刃が閃いた。鋭い切っ先が立て続けに外殻を削り、金色の欠片が夕陽を反射する。その煌めきの中、舞い踊るようにステップを踏み、スイウは神機『獣帝剣』を突きだした。

「ギイイツ……」

後ろ脚を貫かれ、ボルグカムランは体勢を崩した。その短い隙についてスイウは神機を捕食形態に変える。刀身よりも深い闇色の牙が、傷ついた金色に噛みついた。

——いける。

以前、通常種と戦ったときとは違う。大丈夫、もう大丈夫——こんなところで、立ち止まってなんていられないんだから……

「……………喰らえっ！」

硬い甲殻を無理やりに喰いちぎった。直後、横に回転して周囲を薙ぎ払った尻尾を高く跳躍して回避、空中からの突きを見舞う。着地すると身体をひねり、振り向き様に銃形態に変えた神機の銃口を突き付ける。ゼロ距離からガトリングバレットを連射し、限界まで撃ち尽くした。

——いけ……

「!？」

頭上から、連続で針を突き出してきた。空振りした針が地面に刺さり、引き抜かれ、刺さり、引き抜かれ、また刺さり——高速で繰り返される乱れ突きの雨を、スイウはほとんど本能的に回避する。内側ギリギリまで踏み込んで、剣を振り切り刻んでいく。

——いける。

確信した、そのときだった。

「……………痛ッ」

振り下ろされた長大な針がわずかにかすった。神機を握る右腕を、鮮やかな赤が一筋伝い落ちる。一瞬遅れて痛みを感じて、宙に舞った血の雫の動きが、遅くなる。千切れた金属の匂い、飛び散る血、目の前で猛威をふるう人喰いサソリ……

知覚の加速の中で頭をよぎったのは、何年も前の光景だった。

身体の一部を喰われ、全身を真っ赤に染めた少女が、涙を流している。名前を呼んでいる。

——スイウ……！

あの日は、翠雨ではなく——青葉を真紅に染め上げた、血の雨が降っていた。

——スイウ！

「……………やめて」

弱い声が零れ、スイウの動きが止まった。ほんの一瞬頭がぼうつとして、それから、目の前の風景がいつもの速度を取り戻す。気がついたときには、回避不可能な距離まで尻尾が迫っていた。衝撃が身体を揺さぶり、後方に吹き飛ばされる。

「かつ……………は……………」地面を転がり、うつぶせに倒れて呻く。「う……………あ……………」

たった一撃の攻撃で、動けなくなってしまった。立ち上がれない、神機を持てない。右の掌から、鉄の匂いの溜まりが広がっていく——。

——勝てない。

——失敗作だから……………？

心は完全に打ち砕かれてしまっていて、立ち上がる気力がわいてこない。

どうなるのだろう……やっぱり、死ぬのだろうか。

「…………イロハ…………」

蠍の影の下。強まる右手の痛みに顔をしかめながら、アナグラに残してきた彼女の名前を呟いた。

そのときだった。

「何やってんだよ、アンタ」

冷たく落ち着いた、声が聞こえた。

首をひねって見上げると、男にも女にも見える中性的な顔立ちの神機使いが、墮天の蠍と向かい合っていた。

「……………誰…………？」

質問に答えず、彼（彼女？）はその特殊な神機を構えた。引き金に、細い指を添える。

「ただの”試作品”」

吐き捨てるように言って、見知らぬ神機使いはトリッガーを引き

絞
っ
た。
。

反町夕輝（前書き）

どうも！ 妙にテンション上がっているイチゴダイフクです！

バースト、いいですね！ 捕食しまくりです。

チャイナ服姿のサクヤと、水着姿のアリサ、そしてキャラデザが変わったカノンを連れてハーレムですうふふw

反町夕輝

自らを”試作品”と呼んだ神機使いは、ボルグカムラン墮天の前に、スイウを庇うように立ちはだかった。

「さつさと後ろに下がってなよ。あんた、戦えないんだろ？」

そっけない口調は男っぽいが、その声やボディラインから、女性だと分かった。スイウとほとんど年齢の変わらない、神機使いの少女。特徴的なのは、その神機だった。

「……ピストル型……？」

形状から遠距離用だと分かるそれは、今よりもずっと前、ゲンが前線で戦っていたころのピストル型神機に似ていた。ただ、サイズが一回り大きい。そして――

――腕輪が、二つ……

通常、右腕にだけはめられている赤の腕輪が、左腕にも取り付けられていた。

「いくぜ」

口の端を吊りあげて、彼女は吐き捨てた。両手に持ったピストル型神機（？）はどちらも形状が似ているが、右の方が大きい。神機には、炎を纏ったつがいの鳥が彫り込まれている。左手の神機をボルグカムランに向けて、立て続けに引き金を引いた。

ラピッドがボルグカムランの足元に着弾し、盛大な土煙を上げた。土煙を煙幕に彼女は移動し、敵のリーチよりも外から銃撃を続ける。二つの銃口から放たれたオラクルの集中豪雨が命中したのだろう、土煙の中から蠍のひしゃげた悲鳴が聞こえてきた。

——すごい……。

逃げることも忘れて、スイウは彼女の戦いを見つめていた。戦闘は完全に彼女のペースで進んでいる。通常の二倍の銃撃が的確に撃ちこまれ、やがてボルグカムランの体躯は大きく揺らいだ。地面に崩れ落ち、一時的に動きを止める。

「！」

彼女は一気に距離を詰めた。銃撃戦の距離ではなく、近接型神機の間合いだ。——そして、右手の神機を構える。片腕だが、それはまるで——捕食するときのような構え。

「喰らえっ！」

果たして、スイウの予感通りだった。右手のピストル型神機の銃身から大きな漆黒の顎^{あぎと}が現れ、金色の甲殻を喰い破る。神機を引き抜くのと同時に、抉れた捕食の痕に左の銃口をねじ込んだ。

「……消える……っ！」

自分に向けられたわけではないのに、思わず恐怖に震えるほど、その声は憎しみに満ちていた。彼女は冷徹にトリッガーを引き、アラガミバレットが打ち出される。

「ギツ……ガ、アアアツ!!」

至近距離から撃ちだされた「ライティングランス」に貫かれると、金色の蠍は一度だけ咆哮を上げ、それから二度と動くことはなかった。

……

「助かったよ、嬢ちゃん」走行車の運転席で、ゲンがほっとした様子で礼を述べた。「一時はどうなるかと思ったよ」

「別に。アラガミが近くに現れたって聞いたから、戦っただけ」

いたってクールに、彼女——反町ユーキは小さく笑った。それから、隣の席で眠っているスイウをちらと見やる。

「ねえ、こいつ——スイウ、だっけ? 『新型』なんだろう? 弱くないか……?」

スイウは酷くぐったりとしていて、街に向けて装甲車が走りだしてから、ずっと苦しそうに眠り続けている。少女のような横顔を、ユーキは見下すように見ていた。

ユーキの視線に気づいたゲンは、あらかじめ考えておいた言い訳を言った。

「新人だからな。まだ経験が足りないんだ」

「ふうん。……じゃあ、能力は高いわけ？」

「ああ……まあ、な」

ゲンは、最後の方は曖昧に答えた。

ユーキはスイウを見下すような態度を取っているが、能力——というよりも、神機使いとしての性能はスイウの方が上だろう。……いや、確実に上だ。

「……嬢ちゃん」

「嬢ちゃんって呼び方、やめてくれない？ 女扱いされるのって、好きじゃない」

「そうか。じゃあ、ユーキ。俺たちはしばらく、キミたちが守っている街に滞在させてもらうことになる」

「しばらくって、どのくらい？」

「さあな。さつさと目的が片付けば、すぐにでも帰るさ」

「迷惑だけはかけないでくれよ」ユーキはまた、スイウに視線を向けた。「弱い奴は、嫌いなんだ」

「心配するな。スイウは、キミが思っているほど弱くない」

そう、スイウの能力は高い。だが――

「だが、もしもスイウが追い込まれたときは、助けてやってほしい」

——強さ故に、苦しむこともあるのだ。

ユーキは返事をしなかったが、小さくうなずいたように見えた。
もちろん、気のせいかもしれないが。

反町夕輝（後書き）

バースト、ストーリーも面白かったです！ まさかあんな展開と
は……

……え？ 部活？

明日からがんばります……

ミッション履歴（前書き）

ども、イチゴダイフクです。新人戦も終わって、近頃はまったりしてますよー、うふふw

……え、三者面談？

ま、まあ、何とかなるさ！ たぶん……

ミッション履歴

……

サクヤは膝を抱えてうつむき、自室のベッドに座っていた。思い出すまいと気をつけてはいるが、ふとした瞬間に、リンドウのことを考えてしまう。彼と過ごしてきた日々が、少しだけばやけて思い出される。

「おい、サクヤ。——いるか？」

「もう散々言い飽きたけど……せめてノックぐらいしてから入ってきてよ！」

「ああ、わりいわりい」

まったく悪びれた様子もなく、彼は言った。

いつかの日だったろうか。いつものように部屋を訪ねて来たリンドウに、サクヤもいつも通り、冷蔵庫を開けた。

「どうせ私の分の配給ビール目当てなんでしょ？　いっつもすぐ飲んじゃうから……」

「ハハッ、いいじゃんか、どうせお前飲まないんだしさ」ソファにふんぞり返って、リンドウはにやりと笑った。「何なら、アレと交

換するか？ 新型のジャイアントトウモロコシと！」

「いやよー！」

そこまで思い出したところで、視線を少し上げると、冷蔵庫が目に留まった。何気なく歩み寄って開けてみると、本来飲むはずだった人がいなくなってしまうた缶ビールが並んでいた。そのうちの一つを手にとると？何か？が床に落ちた。

「何これ……？」

小さな円形の？何か？を拾い上げる。耳には、いつの日か聞いたリンドウの声が蘇った。

——配給ビール、とっておいてくれよ……

……

「腕輪認証がかかっている……リンドウの……？」

手元のパネルを操作しながら呟く。

「そもそもあの日は、イレギュラーが不自然なまでに多かった……」
普段なら思い出そうとはしない、彼のいなくなった日のことを思い出す。「指令情報との食い違い……アリサの様子もおかしくって……」

……取り残されたリンドウとスイウは、敗北した。

「あ……」

ピタッと、タイピングを止めた。モニタの表示を見つめ、疑念を孕んだ声を上げる。

「あの日のミッション履歴が消されてる……!？」

——どういうことなの、リンドウ……

「あの……」

「!」

突然扉が開き、サクヤは慌てて背後を振り向いた。

「……なんだ、イロハちゃん……どうかしたの？」

「はい。……あの……アリサのことで」

……

イロハは、アリサが目を覚まし、快方に向かっていること。手に触れたとき、彼女の過去を知ったこと。その記憶の中で、気がかりなことがあったことを話してくれた。

「……そう、アリサが……教えてくれてありがとう」

イロハは心配そうな表情を浮かべていたが、サクヤは穏やかに微笑んだ。

「それにしても、触れるだけで気持ちを通じ合うなんて、新型同士の能力なのかしらね……。おねがい、しばらくは彼女の傍にいてあげて」

「はい。サクヤさんも、その……元気、出してくださいね」

「ん……イロハちゃんも、無理はしないで」

「……はい」

イロハが部屋を出ていくのを見送って、サクヤは溜息をついた。先ほどから、捉えどころのない疑念が徐々に大きくなっていつている……。

——何が起きてるの、リンドウ……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3497k/>

GOD EATER—青葉に滴る雨—

2010年11月9日12時20分発行